

539

26



始

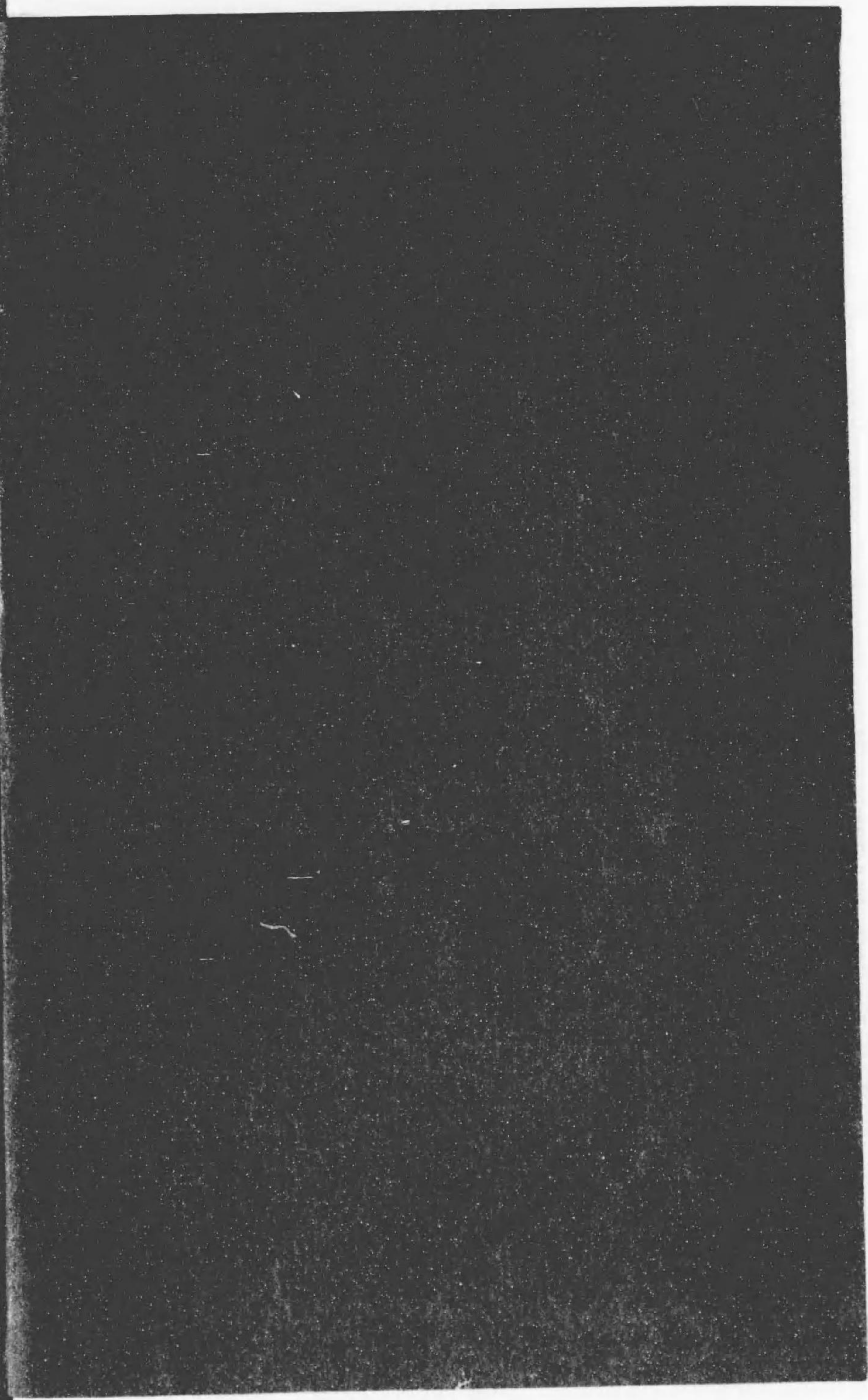
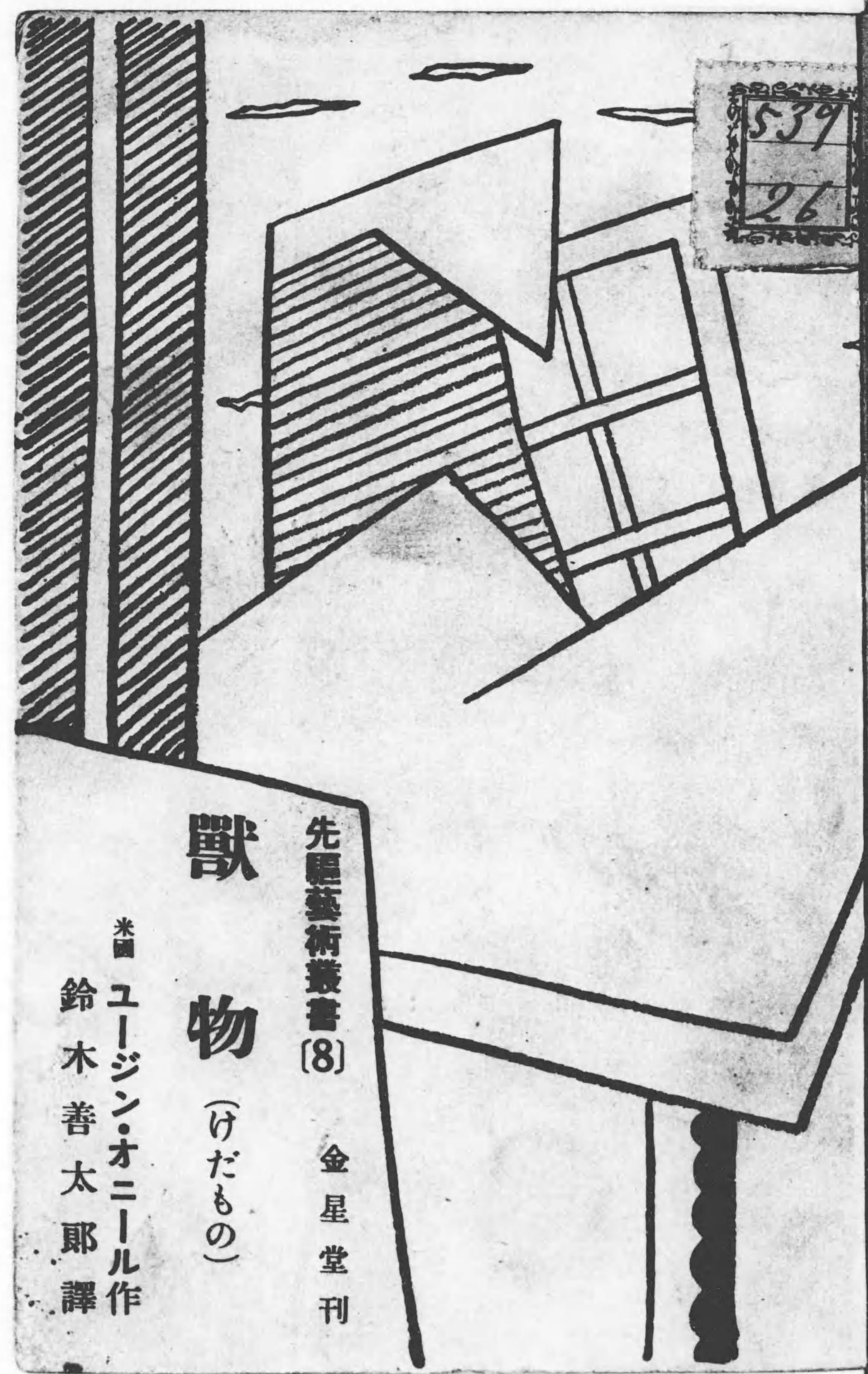


539  
26

獸物 (けだもの)

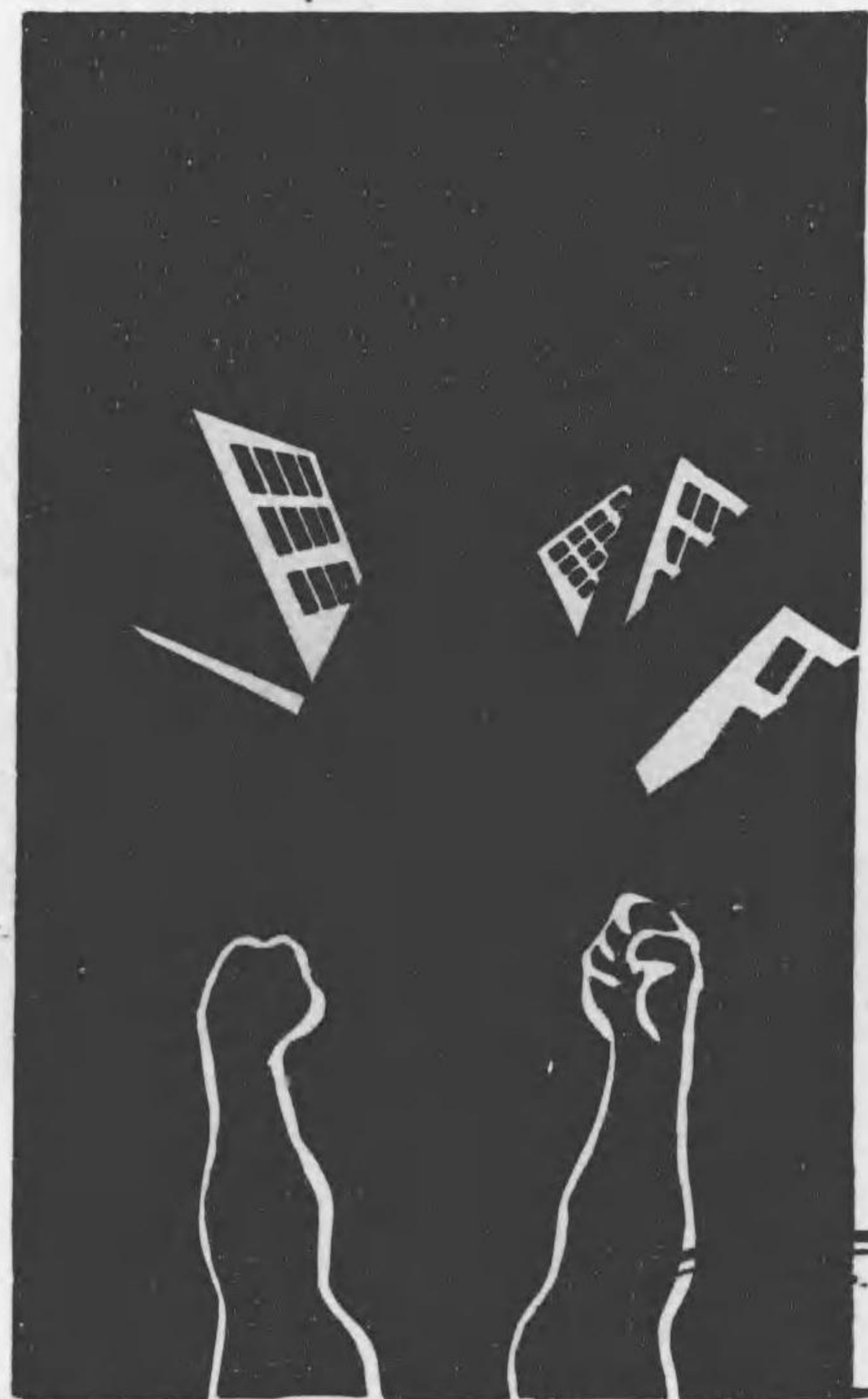
先驅藝術叢書 [8] 金星堂刊

米國 ユージン・オニール作  
鈴木善太郎譯



物 獸  
(場 八)  
作ルニオ・ンジーユ  
譯 郎 太 善 木 鈴

[8]



正  
14. 5. 14  
内 交

1925  
版出・堂星金・京東



539-26

## 序

ユージーン・オニール Eugene O'Neill は亞米利加が産んだ純亞米利加的な戯曲家である。エ  
ヂソンや、フォードや、ロックフェラアや、ルーズヴェルトはそれぞれの方面に於ける亞米利加  
の代表的人物である。同じ意味で、オニールは亞米利加の新興藝術を代表するところの戯曲家で  
ある。

亞米利加の戯曲界は近年に至つて數多の新人を輩出した。その中にあつて、オニールは著しく  
頭角を抜いてゐる。空を突いて高く聳え立つ摩天樓は、亞米利加を代表する建築である。亞米利  
加の新興戯曲界に於けるオニールの地位は、まさに一個の摩天樓である。

オニールの名聲は最早亞米利加の國土を超えて全世界に傳はつてゐる。英國でも、佛蘭西でも、  
獨逸でも、スカンデナヴィアでも、オニールは好劇家の熱狂の的となつてゐる。「鬍物」The Hairy

Ape や「皇帝ジョーンズ」Emperor Jones は、歐洲各國の首都にその演出を繰返されて成功を収めた。

オニールは一八八九年紐育に生れた。その父ジエームス・オニールは先年物故したが、名の知られた俳優であつた。兄は父の名と同じくジエームスと云つて、これも俳優であつたが、先頃病歿した。オニールは始めプリンストン大學に學んだが、僅か一ケ年で退學して、紐育市内の通信販賣店の秘書となつた。これが彼が世間に出た始めである。

それから彼はさまざまな經驗をした。船員となつてアルゼンチンに行つたり、そこに滞在して輸入商の手傳をしたり、それから又船員となつて南阿弗利加に行つたりして、地平線の彼方に幾度か放浪生活を送つた。その中に彼は父の地方巡業團に加はつて、俳優として働いた。それから新聞通信員となつた。一九一四年、彼は肺結核にかゝつた。(彼は今日尙この病氣に苦しんでゐる。海岸ですつと暮してゐるのも、この爲めである。)この病中偶然戯曲を書いたのが、後年戯曲家として世に立つ機縁を作つた。一幕物「飢渴」Thirst はこの間に書いたもので、同じ年に他

の一幕物を附け加へて、父から貰つた金で自費出版した。然し誰も彼の戯曲家としての手腕を認めて呉れなかつた。翌年彼はハーバート大學に入つて、バーカー教授の指導を受けながら、更に戯曲を書き續けた。グリーンニッチ・ヴィレイジ・プレーヤーズや、プロヴインス・タウン・プレーヤーズに關係が出来てから、彼は段々認められて來たが、一九二〇年「地平線の彼方」Beyond the Horizon が始めてプロードウエーでペンネットの手に依つて上演されるまでは、彼の作品は職業的な劇場人からは顧られなかつた。

彼は今紐育から餘り遠くない小さな漁村に、都會の繁雜な生活を避けて、心靜かに暮らしてゐる。そこは海中に突出した美しい砂丘である。愛兒のシェーンは濱邊に砂いぢりをして遊んでゐる。妻のアグネス・ブルトンは一室に入つて短篇小説を書いてゐる。そして彼は原始人のやうに太陽の輝く砂地をあちこちぶらつきながら、彼が會つて體驗した事柄や、知り合になつた男や女の鬭争に戯曲の形を與へて、感興が湧いて來れば書齋に馳け込み、非常な速力で一氣呵成に書きあける。

レオナルドや、ターナーや、ホキスラア等が、その初期に鉛筆畫のスケッチを試みたやうに、

彼も初期には一幕物ばかり書いてゐた。「地平線の彼方」は長篇戯曲の最初の作である。彼は可なり多作家である。一幕物十六篇、二幕物一篇、三幕物六篇、四幕物五篇、六場物一篇、八場物二篇、十一場物一篇、これ丈けを彼は筆を執り始めてから今日までの十年間に書いてゐる。

彼は多角的な作家である。ずつとリアリズムを奉じてゐた時分にも「霧」や「十字のあるところ」Where the Cross is made や「金」Gold などを書いた。そして遂に「皇帝ジョージス」から「黙物」に至つて、ハッキリと表現派の手法を見せた。「黙物」は亞米利加表現派の代表作である。

「黙物」は一九二二年の作である。前後八場から成つてゐる。汽船の火夫ヤンクが自分は「生きてゐる」Belongs と云ふその自信を打ち碎かれて絶望のどん底に投げられる事を取扱つたものである。

ヤンクは火夫部屋の中で、かう叫んでゐる。

「世界を動かすその外の何一つだつて、ある奴が動かしてゐるからなんだ。そいつがゐらなかつ

た日にや、動く譯がねえ。よつく聞えてゐる。俺はどん底にゐるんだ、いゝか！ この先きは何もねえんだ。俺は最後だ！ 俺は跳び出すんだ！ 俺が跳び出しや、世界は動くんだ！……鋼鐵は何でも出来るんだ！ 俺は鋼鐵だ——鋼鐵だ——鋼鐵だ！」

汽罐室に「生きて」ゐない階級の女がやつて来る。この女が「黙物」を見てびつくりする。ヤンクの自信は打ち碎かれる。彼は復讐を企てる。紐育の町の中でその女の階級を罵り、罪を得て牢に入る。獨房の中でアイ・ダブルユー・ダブルユーの事を聞いて、逃げ出し、煽動家の廻し者と見られて戸外に投げ出される。彼は叫ぶ。

「俺は鋼鐵だつた、俺は世界を支配してゐた。然しもう俺は鋼鐵ぢやねえ、今ぢや世界が俺を支配してゐるんだ。」

あくる日の夕方、彼は動物園の檻の中にゴリラを見て、自分の「親類」に凱歌を奏させる爲めに、ゴリラを逃がさうとする。そしてその報酬としてゴリラの爲めに打ち殺されて了う。「處で、多分、あの黙物は遂に生きる事が出来た」と作者はト書きの中で書いてゐる。

この戯曲は因襲や、社會や、文明や、全人類に對する熱烈な挑戦である。もし何人もヤンクの

やうな境遇に置かれるならば、我々は動物に歸つて、我々の生活を再び出直さねばならぬ事を警告するものではなからうか。ヤンクがかくの如く苦しむところの脅威は抑々何であるか、この戯曲自身がそれを語つてゐる。

一九二五年二月

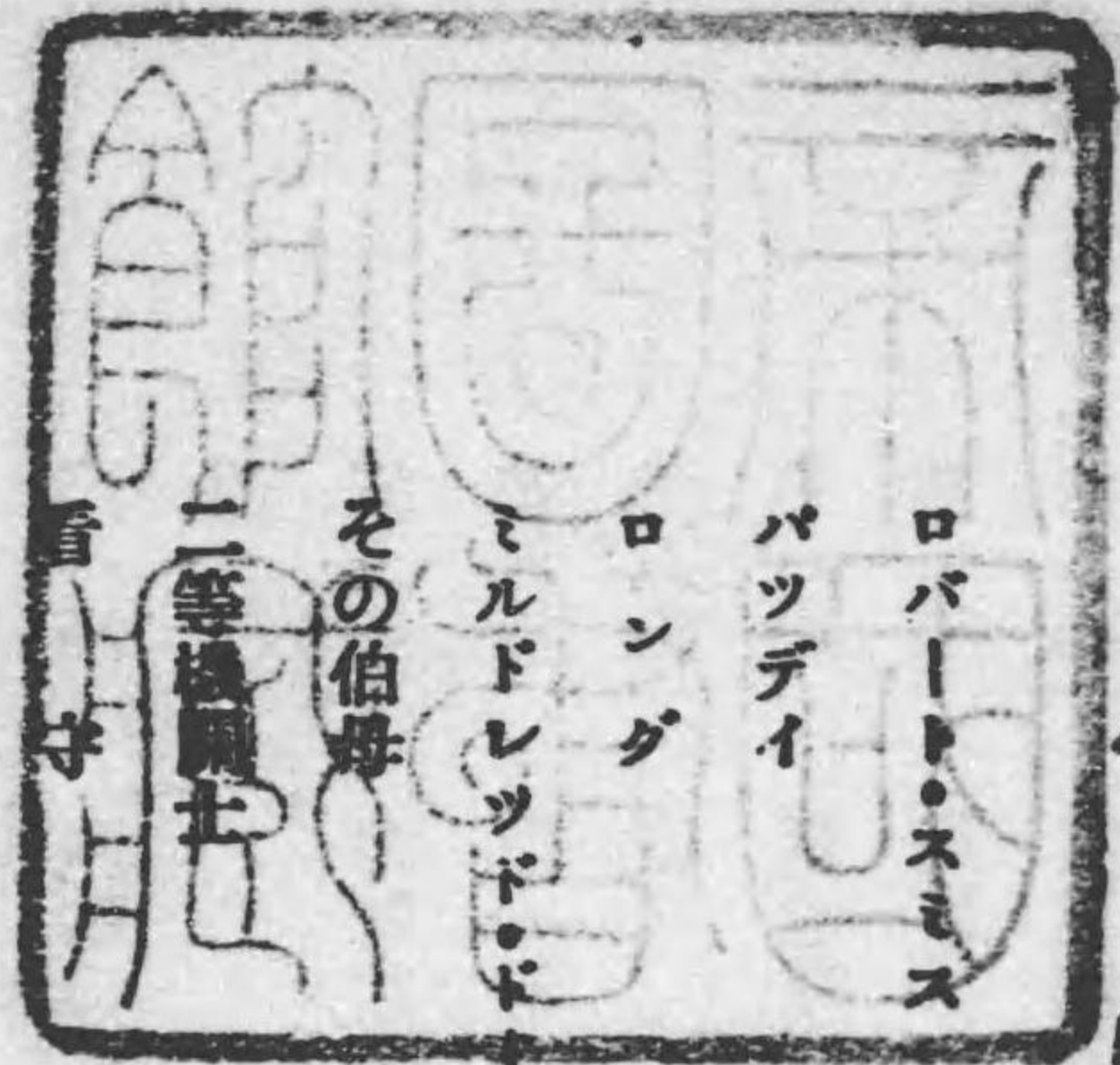
譯者

獸

物

(過去と現代の八場の喜劇)

ユージーン・オニール作  
鈴木善太郎譯



人物

(あだ名「ヤンク」)

ロバート・スミス  
パツデイ

ロンダ

ミルドレッド・ド  
グラス

その伯母

一等機關士

看守

秘書役

火夫、夫人、紳士、その他



場面

- 第一場。汽船の火夫部屋—紐育解纜後一時間。
- 第二場。プロメナード・デッキの一部、二日後—朝。
- 第三場。汽罐室。數分後。
- 第四場。第一場と同じ。半時間後。
- 第五場。紐育、フィフス・アヴェニュー。三週間後。
- 第六場。紐育附近のある島。翌夜。
- 第七場。紐育市中。一ヶ月後。
- 第八場。紐育市中。翌日の夕刻。

時—現代

第一場

場面—大西洋航路汽船の火夫部屋、紐育解纜後一時間の航海中。狭い層をなしてゐる鐵板の寢床が三列に奥に入り込んでゐる。後方に入口。寢床の前の床に二三のベンチ。室の中に多勢が集つて、叫んだり、罵つたり、笑つたり、歌つたりしてゐる。—その騒ぎは今の先始まつたばかりで、その聲は段々高くなり、聲の中の歌の困亂や、狂暴や、焦々した反抗に似たものに統一される。一同は殆んど酔拂つてゐる。ビール瓶は幾本となく一同の手から手に移る。皆粗綿布のズボンと、重い不格好な靴をはいてゐる。二三の者は肌着を着てゐるが、大部分上半身は裸體である。

この場面も、他の場面も、この戯曲では寫實的に取扱つてはならぬ。只白く塗つた鐵板で圍まれた船内の狭苦しい室を思はせる効果があればいゝ。幾つもの寢床の縁が直立してゐて、櫓の鐵骨のやうに互に交差してゐる。天井は一同の頭の上に低く覆ひ被さつて、誰も眞直には立てない位である。この爲めに一同は自然に腰を屈めて、シヤアルで石炭をすくふ時のやうな姿勢を取る。従つて一同の背中と肩の筋肉は異常に發達してゐる。彼等は繪に書かれたネアンダータール人の容姿に酷似してゐる。會毛のある胸や、恐ろしい力のある長い腕や、小さな、烈しい、怨み憤るやうな眼や、それから又下品な、後の方に向つてゐる肩を持つてゐる。皆白人であるが、髪の色が、皮膚の色が少しく變つてゐる。彼等はどれも同じやうな顔附をしてゐる。

賑々しい音の中に暮が上る。ヤンクは前方に坐つてゐる。彼は仲間では一番大膽で、野蠻で、激烈で、力があつて、しつかりしてゐる。仲間には皆彼の優越な力を尊敬してゐる。——と云ふよりは寧ろ恐れて敬遠してゐる。すると又彼は、自分が彼等の中で最も進歩した人間であると云ふ事を、彼一流の態度で一同に見せ附けてゐる。(ネアンダータール人とはライン地方から掘り出された原始人のどくろの事である。)

——さア俺に飲ませろ、おい！

一杯やれ！

ありがてえ！

健康を祝す！

しめたぞ！

旦那氣取りで飲み、こん畜生！

どんなもんでえ！

うまいぞ！

その瓶を返しやがれ、馬鹿！

彼奴の頸根つこにぶつ掛けてやれ！

よう、蛙奴！ 貴様何處にゐやがつたんだ？

ツルンによ。

叩き殺すぞ、阿呆！

一等機關士の——ジエンキンスの奴——彼奴厭な野郎だぜ——  
で巡査が彼奴を掴へたんだ——俺は逃げたがな——

俺はビールが大好きだ。手前になんかやつて堪るもんけえ。

おひきすりがよ、まア聞けよ！ あの女郎、俺を眠らせやがらねえんだ——

そんな女郎共はみんなくたばつちまへ！

手前は嘘つきだ！

もう一遍云つて見ろ！ (騒動。二人の男が喧嘩し掛けて、引分けられる。)

もう願ぎやがるな！

今夜だぞ——

手前のやうな頼馬とは違うんだ！

このひよろく玉！

今夜触に出ろ。

俺はどうしたつて厭だ。

おい、あの野郎ぶん殴りやがつたぞ！

黙りやがれ、この盤若面！

喧嘩をするな、兄弟。みんな同じ室なんぢやねえか、フム？

(二人が唄を呻り出す。)

「ビールビールで夜を日を暮らす

飲めなきやいつでも寝て暮らす」

ヤンク——(始め騒ぎなちつと見てゐたが、やがて威嚇的に振り返り、傲慢な權勢づくの調子で)ちつと  
静かにしねえか、おい！ 手前そのビールに何處であり付きやがつたんだ？ ビールが何だ、  
畜生！ ビールなんて阿魔つ子か——頓智機野郎が飲むもんだ。俺アもちつとピリットした奴  
が飲みてえ。やい、どいつか俺に一杯飲ましやがらねえか。(數人が熱心に酒の瓶をさし出す。彼  
はその中の一本を引つたくつて、グイと一口息に呑み干す。それからその瓶を手に持つて、それを受れた

男をまるで喧嘩でも吹き掛けるやうに睨み附ける。するとその男はすぐに、ヤンクに瓶を取られた事を何とも思つてはゐないと云ふ風を見せる。

聲——構やしねえよ、ヤンク。取つて置きなつて事よ、足りなきやもつとやらア。(その男がかう云つてゐる間に、ヤンクは再び一同に背中を向ける。一瞬間氣まづい沈黙。やがて——)

聲——岬にかよつたやうだな。

道理で少し横揺れがし出したぞ。

六日間地獄にゐりや——あとはサウサンプトンだ。

後生だから誰か俺の當番を代つて呉れねえか。

船よひかい？ 大將。

飲んで船よひを忘れるがいよや。

手前の瓶は何だ？

ジンよ。

飲むなア止しやアがれ。

アアサンか。腹に入つてらア。手前愚圖々々してるやがるから仕方がねえ。頼馬野郎！

この死に損ひ奴！

ウイスキーか、こいつア一番だ！

パツデイの野郎は何處にゐるんだ？

坐眠してやがらア。

おい、パツデイ、ウイスキーの唄をうたはうちやねえか。(一同は年を取つて、しなびた愛蘭人を振り向く。その男はひどく酔つて、前の方のベンチで坐睡をしてゐる。顔は猿に酷似してゐて、小さな眼には動物のやうな悲しげな哀愁がある。)

いつもの唄をうたはねえかよ、カルソー先生！

年寄りの癖に、あんまり飲みやがつたからさ。

酔拂つてやがる。

パツデイ——(眼を細くして自分を見、怒めしきうに、身體を傾はしながら跳び上つて、寢床の縁につかまゐる。)酔拂つたつて唄はうたへるぞ。わしが唄つてゐるウイスキーの爲めに死んだら、あとほう

たへねえ丈けよ。(悲しげな、偉つた調子で) お前達、「ウイスキイ可愛いや」をうたへつてか、お前達、船歌をうたへつてか。やれくお前達のやうな鬼共にも似合はねえ殊勝な心掛いだ。まアそんな事はどうでもいゝや。(彼は細い、鼻にかゝつた、真意を帯びた聲でうたひ始める。)

「ウイスキイ可愛いや男の命

ウイスキイ金色オウゴン黄金色オウゴン(一同一しよに唄う。)

ウイスキイ可愛いや男の命

ウイスキイ美しくし黄金色(再び合唱。)

ウイスキイと聞けば泣く子も笑ふ

ウイスキイ金色黄金色

ウイスキイと聞けば泣く子も笑ふ

ウイスキイ美しくし黄金色」

ヤンク——(再び輕蔑したやうに振り向きつゝ) やい、畜生！ ボロ帆前船の化物奴ばいもの！ そんな物は通用しねえや。手前てまへなんかも通用しねえぞ、おいぼれ、それを知らねえのは手前ばかりだ。わかつたか。ちと静かにしろ。騒々しい野郎だ。(皮肉に毒づいて) 俺が考へ事してゐるのが、手前にわからねえのか。

一同——(同じ皮肉な嘲笑的な口吻で、鷓鴣返しに繰り返す。) 考へ事！ (その聲は一同の咽喉が音聲擴大器でもあるかのやうに眞鍮のやうな金属性を帯びる。烈しい、吠え附くやうな笑聲の騒々しさがそれに續く。)

聲——考へ事して頭を滅茶々にしねえがいゝぜ、ヤンク。

頭痛がするぜ、おたんちん！

いゝ事を教へてやる——飲みや唄が出らアな！

ハ、ハ、ハ！

飲め、考へ事は止せ！

飲め、考へ事は止せ！

飲み、考へ事は止せ！（床を踏む足踏や、拳でベンチを叩き立てる一同のガヤガヤ云ふ聲が遂に聞えなくなる。）

ヤンク——（手の瓶を傾けてグイと一飲みして——素直に）よし。静かにしろ。わかつたよ。（腹が洗まる。ひどく碎拂つた感傷的なテナーの聲が唄ひ始める。）

「カナダは遠し海越へて

八重の汐路をはるぐくと

あの子いとしや二人して

家を持つ日を待ち暮らす——」

ヤンク——（烈しい侮蔑を籠めて）黙りやがれ、コン畜生！ 何處を押しやそんな音が出るんだ。家だ？ 家か、畜生！ 立派な家を持たせてやらア！ 殴り殺されねえやうにしろ。家か！ 家も妻もあるもんか！ 何處を押しやそんな音が出るんだ。これが家だぞ。家を持つてどうしよ

うと云ふんだ。（誇りやかに）俺アまだ餓鬼の時分、九つの年から家をおん出たんだ。その時位俺アうれしかつた事はねえ。家ん中ぢや俺は擲られ通したつた、だからよ。だが、それ以來俺が擲られた事はねえと思ふと、當が違うぞ！ 手前達さう思ふか。フン！ そんな事アねえや！（すつと仲直りをして、然しまだ侮蔑の調子で）あの子が手前を待つてゐるつて、フン畜生奴！ 寢言を吐せ。女つ子は誰も待つてゐやしねえ。あいつ等は金にさへなりや、いつでも寢返りを打つんだ。あいつ等アみんなこすいや、いゝか。あいつ等をひどい目に逢はせてやれ、いゝか。あん畜生共。あいつ等どいつだつてこすいんだ。

ロング——（ひどく酔拂つてゐる、興奮してベンチの上に跳び上る、手の瓶で身振りしながら）聞け、兄弟！ ヤンクの云ふ通りだ。このこぎたねえ船は俺達の家だつてあいつが云つてゐる。家は地獄だつてあいつが云つてゐる。その通りだ！ こゝは地獄よ。俺達は地獄に棲んでゐるんだぞ、兄弟——俺達は地獄の中で死ぬんだぞ。（激怒して）で、これや誰の科だ、俺はみんなに聞く。俺達の科ぢやねえ。俺達はこの腐つた境涯に生れ落ちたんぢやねえ。誰でも自由で平等に生れてゐるんだ。こんな事はへまな聖書に書いてあるんだぞ。だが、あいつ等はどいつも聖書

なんか見向きもしねえちやねえか——あの怠け者の、道楽者の、一等キャビンに納まつてゐる豚共はよ！ あいつ等が何だ、俺達をボロ船の底に押し込めて、アクセク働かせて、黒焦けにして、石炭のカスを食はせて、ほんの手間取り乞食に引き摺り下ろしやがつたんちやねえか！ 科カはあいつ等にあるんだ——資本階級の畜生奴！（一同の中に侮蔑的な憤りの囁きが段々蓄じて、遂に猫泣き聲や、叱聲や、嫌厭の叫び聲や、烈しい笑聲の嵐の爲めに、彼の聲は聞えなくなる。）

聲——止めろ！

黙れ！

坐れ！

引込め！

馬鹿野郎！（その他）

ヤンク——（立上つてロンケを見詰めたが）坐らねえとぶちのめすぞ！（ロンケは慌て、姿を消す。ヤンクは侮蔑を籠めて言ひ續ける。）聖書だ、フン。資本階級だ、フン。救世軍社会主義のけだもの奴。面オモでも洗つて來やがれ！ こゝは一體教會か。救ひを求めなさいか、フン。エス様の處

へ連れて行つて下さいか、フン。糞喰へ！ 俺ア手前のやうな奴にや随分逢つて來た。手前等はみんな間違つてやがらア。なぜつて云ふのか。手前等は誰一人の爲めになりやしねえちやねえか。オツチヨコチヨイ奴。云ふ事が違つてらア。下卑な事を吐かしやがるな。下卑野郎。おい！ 一等キャビンの奴等が俺達と何の関係があるんだ。俺達はいつ等よりも上等な人間なんだ、さうぢやねえか。たしかにさうよ！ 俺達一人の力で、あいつ等みんなをすぐにもやつつける事が出来るんだ。あいつ等のどいつでも、一當直の間汽罐室コウキタンシツに置いたらどうなる？ 擔架で運び出されるやうになるに極まつてらア。何の役にも立ちやがらねえ。あいつ等はまるで荷物同然さ。一體誰がこのチューブに蒸氣を通すんだ？ 俺達ちやねえか。だから俺達は生きてゐるんだ、さうぢやねえか。俺達は生きてゐるが、あいつ等は生きてやしねえ。それ丈けだ。（變成の高い叫び聲。ヤンクは云ひ續ける。）こゝは地獄だつて云ひやがつたが——ウン、結構さ！ 手前にや譯がわからねえんだ。これやア男の仕事さ、いゝが。男の仕事は生きてゐるんだ。このチューブに蒸氣を通すんだ。死骸にやこんな事は出來ねえ。手前は死骸か、フム？

下卑野郎。

聲——（自ら大なる強い自負心に驅られて）

その通り！

男の仕事だ！

詰らねえ事云ふなよ、ロング。

あいつアいつでもしくじりやがる。

あん畜生！

ヤンクの云ふ通りだ。俺達は賛成だ。

ヤンクはうまい事を云ふな！

俺達は誰にも氣の毒がられる必要はねえんだ。

飛んだ演説をやりアがつた。

あいつを引摺り出せ！

下卑野郎！

海の中にはうり込んで了へ！

ムダ口を叩かせるな！

（一同脅迫的にロングを取り囲む。）

ヤンク——（再び半ば優しくなつて——侮蔑的に）おい、許してやれ。かまうな。いちめる事アね

え。飲め。誰の物だらうと、まアいゝや。（彼は自分の手の瓶を傾けて大いに飲む。一同一しよに飲

む。一寸の間一同は再び嬉しさうに愛嬌を作つて、背中を叩いたり、聲高に話したりする。）

パツデイ——（憂鬱に眼をシバタ、かせて坐つてゐたが——突然悲しみに充ちた聲で叫び出す。）わし達は

生きてゐる、お前さんはさう云ふんだね？ わし達は船を動かす、お前さんはさう云ふんだね

？ それぢやアあんまり情無えぢやねえか！（彼の聲は慟哭の叫びに變る。彼はベンチの上で前や

後に揺れる。一同は彼を見詰めて、びつくりし、そして深く感動する。）あゝ、わしの若い時分のあの

樂しかつた時の事が思ひ出されるよ！ あの時分には美しい立派な船があつたものだ、——空

を突いて立つてゐる高い帆柱のある船だ——その中には頑丈な男達に乗つてゐた——その男達

は生れながらの海の子だつた。みんな綺麗な肌と、澄み切つた眼と眞直な脊中と廣い胸を持つ

てゐた！ みんな勇ましかつた、ほんたうに肚胸があつた！ 出帆となると、ホーンを下つて



出て行き々々したものだ。大抵明け方の船出だ、そよ／＼と吹く風を切つて、無頓着に船歌をうたつたつけ。うしろの方には陸地が段々低く沈んで行つて、仕舞に見えなくなる。然しわたし達は只笑つてゐるばかりで、そんな事を何とも思はなかつた、うしろを振り返つて見さへしなかつた。あの時分はそれで満足だつた、わたし達は自由人だつたから——いや、こんな事は奴隷の云ふ事だ、奴隷達はわしのやうな年よりになるまで、過ぎ去つた事や未來の事を氣にして暮らしてゐるんだ。(宗教的な得意まで) あゝ、せめて今一度、晝も夜も規則立つた貿易風に船を吹かせて、南へ南へと走りたい！ 帆と云ふ帆を掲げて！ 夜も、又晝も！ 船跡の泡が灯影を映して燃える時に、大空が一ぱいの星でキラ／＼と輝き渡る時に、夜が来るんだ。それとも月が照つてゐるかも知れない。こんな時、船は楽しい徹夜をして走るんだ、帆と云ふ帆は銀色か白い色で高く風を孕んで、デッキには何の物音もない、わたし達みんなは夢を見ながら眠つてゐる、丁度いつまでもいつまでも港に着く事もなく、海から海をめぐり歩くと云ふさまよへる和蘭人のやうに、わたし達の船はほんたうの船ではなくて、幽霊船か何ぞのやうに人は思ふかも知れない。清々しい甲板にやがて暖かな太陽が射して来る。太陽は血液を暖めて呉れる、そし

て風は肺の臓一ぱいに吸ひ込ませるやうに、日の照る青々とした大海の何哩も先きから吹いて来る。仕事——さう、辛い仕事だよ——だが、誰もそんな事を氣に懸けはしない。さうとも、青空の下で働いて、仕事には馴れて来るし、仕事に對して親しみが出て来る。そして日が暮れると夜番が来る。樂々と晝をふかしながら、時とすると、陸地が水平線の上に表はれて来るのを見附ける事もある、それから又白い頂や浮雲が夕日の眞紅な火に染められてゐる南アメリカの山を見てゐる事もある！(彼の得意な調子が中絶する。彼は悲し／＼に言葉を續ける。)いや、こんな事を話したつて何になるんだ？ これは死人の寢言だ。(怨めしげにヤンクに向つて)あの時分こそみんなは船に對して生きてゐたんだ、今時はそんな事はありやしねえ。あの時分、船は海の片われだつた、男は船の片われだつた、そして船はみんなを一つに結び附けたもんだ。(侮罵するやうに)それにどうだね、ヤンク——煙突から立つ黒い煙は、海を穢し甲板を穢すんだ——汽罐の音生は喧ましい音を立て、揺ぶりがやる——お蔭で日の目も見えなければ、清い空氣を吸ふ事だつて出来やしねえ——肺の臓は石炭カスで息も吐けやしねえ——汽罐室の地獄の中心や脊中も心臓も破裂すらア——電の音生に石炭を食はせて——わたし達も石炭を食つて生きてゐ

るんだ、いゝかね——空一つ見えねえ鐵の檻かごの中で、まるで動物園の猿ぢやねえか！（荒々しく笑つて）ハツハ、畜生奴！これがお前さんの望みの生きてゐる事かね？ 血と肉が汽罐の輪になりやそれでお前さんはいゝのかね？

ヤンク——（侮蔑的な冷笑を浮べて聞いてゐたが、返答を爆發させる。）さうとも！それが俺だ！だからどうしたと云ふんだ？

パツデイ——（自分の事のやうに——ひどく悲しげに）わしはもうすたれものだよ。昔照つてゐた太陽の光が時々萬遍なくわしを撫でよ、もう過ぎてしまつた昔の夢を見させて呉れる丈けなんだよ！

ヤンク——やい、この氣違ひ爺奴！（彼は跳び上り、背やかすやうにパツデイの前に進み——やがて立止り、内心のある不思議な煩悶と戦ひながら——兩脇に手を落して——侮蔑的に）いや、ほうつて置け。手前の云ふ通りだ。おいぼれ爺奴、その通りだよ——味のある事をぬかしやがる。手前の説教は——いや、みんなほんたうだ。今時只はやらねえ丈けよ、いゝか。もう今ぢや手前は通用しねえや。手前にやわからねえんだ。おいぼれてゐるからな。（思々しきうに）だが、おい、も少しし

つかりしろ、いゝか。手前がぶつ／＼云ひやがつたつてそれがどうなるんだ。（彼は突然烈しく進み出て、次第に興奮して来る。）おい、その通りだ！その通りだとも！畜生——おい、いゝか！おい！おい、おいぼれ！おい、爺！おい、聞けよ——待つてくれ——俺がしやべるんだ。俺は生きてゐるが、こいつは生きてやしねえ。こいつは死んでゐるが、俺は生きてゐるんだ。聞けよ！全く俺は汽罐の片われだ！さうとも！汽罐は動いてらア、さうぢやねえか？ 汽罐は速力を出してらア、さうぢやねえか？ 汽罐はガタガタやつてらア、さうぢやねえか？ 一時間二十五ノットだ！素的だぞ！素晴らしいぞ！汽罐は生きてゐるんだ！だが、こいつアおいぼれてゐるやがる。こいつアほけてゐるやがる。おい、いゝか。夜も、又晝もだ、星に月だ、太陽に風だ、新しい空氣と何とかだ、みんなこりやア寢言だ——畜生、勝手な熱を吹きやアがれ！昔は一かどの男だつたらうが、只それ丈けの事ぢやねえか。今ぢやおいぼれて、もう役にや立たねえや。だが、俺は、俺は若いぞ！俺には血があるぞ！俺は血で動くんだぞ！わかつたか！こゝが肝甚なとこだぞ。こいつの世迷ひ言は聞いてあきれらア。糞喰へだ！ぶちのめすぞ！張り倒すぞ！わかつたか！汽罐と石炭と煙と、それから何

も彼もだ！ こいつア息を吐く事も、石炭カスを呑む事も出来ねえ、だが俺にやそれが出来るんだ！ それが俺を生き返へらせるんだ！ それが俺のかただ！ 俺は若いぞ、いゝか。汽罐室の地獄だつて？ さうとも！ 男は地獄の中で働くんだけ。ウン、さうだ、これが俺のお氣に入りの場所だ。俺は地獄を食つてゐるんだ！ 俺は地獄で太るんだ！ 地獄を熱くするのは俺だ！ 地獄を喰らせるのは俺だ！ 地獄を運轉させるのは俺だ！ さうだ、俺は残らず止めて見せる。するとみんなくたばつて了うんだ、わかつたか。世界を動かす音と、煙と、汽罐がみんな止まるんだ。するともう何も彼もお仕舞になるんだ！ みんな、よつく覺えてゐろ。世界を動かすその外の何一つだつて、ある奴が動かしてゐるからなんだ。そいつがゐらなかつた日にや、動く譯がねえ。よつく聞いてゐろ。俺はどん底にゐるんだ。いゝか！ この先きは何もねえんだ。俺は最後だ！ 俺は跳び出すんだ！ 俺が跳び出しや世界は動くんだ！ それだ——それが俺だ！ ——古物を打ち毀して了う新手だ！ 俺は燃えてゐる石炭だ。俺は汽罐の蒸気と油だ。俺は手前達が聞いてゐるあの音だ。俺は煙と急行車と汽船と工場の笛だ。俺は金になる金だ！ それから俺は鋼鐵になる鐵だ！ 鋼鐵は何でも出来るんだ！ 俺は鋼鐵だ——鋼鐵

だ——鋼鐵だ！ 俺は鋼鐵の中の筋だ、鋼鐵のうしろの打印器だ！ (彼はかう云ひながら鋼鐵の機床を拳で打つ。一同は彼の言葉を聞くと氣違染みた自己實際の極度に達して、同じやうに打つ。金屬性の唸り聲が轟然と起る、その中にヤンクの吐鳴る聲が聞える。) 畜生奴！ 俺達はどんな事でもするんだ。金持の奴等は一かどの人間だと思つてやがる、あいつ等に何が出来るもんか！ あいつ等は生きてやしねえ。だが俺達は、俺達は動いてゐる、俺達はほんたうにゐるんだ、俺達は凡ての物だ！ (パツアイはヤンクがしやべり始めた時から、手の瓶を傾けて段々飲んでゐる。最初は聞く事を恐れてゐるやうに脅やかされ、やがて正氣を失つたやうに絶望して、それでも最後には全く平氣になつて、面白さうにさへして、酔拂つて了う。ヤンクは動いてゐるパツアイの唇を見る。彼は一しきり叫び聲を立て、靜かになる。) おい、みんな、さう堅くなつてやがるな！ 待て！ 爺さんが何か云つてゐるぞ。

パツアイ——(その聲を聞く——そり返つて嘲笑するやうに大笑する。) ハーハーハーハー——  
ヤンク——(拳をうしろに引いて吐鳴る。) やい！ 誰の事を笑つてやがるんだ！  
パツアイ——(ひどく上機嫌で唄ひ始める。)

「人の事ならわしや知らぬ

人もわたしを見向きやせぬ」

ヤンク——（一瞬間上機嫌で、何か話でもあるやうにパツタイの露き出しの背中をピシヤリとやつて、唄を述る。）しつかりしろよ！ お前もしやれた事を云ふね。人の事は知らねえつて、その通り！ 世間の奴等くたばつて了へ！ 誰にも見向いて貰はねえのが最上よ。自分で自分を守ればいゝさ、さうぢやねえか！（船の中心に埋めて置いた大きな真鍮の銅羅でもあるやうに、八つの数を打つベルの音が鋼鐵の壁に鳴り響いて、やがて消える。一同は機械的に跳び上り、囚人の行列のやうに次ぎ次ぎに並んで、黙つて戸口から列を作つて出て行く。ヤンクはパツタイの背中をピシヤリと打つ。）さア當番だよ、爺さん——（嘲笑的に）地獄に行くんだ。石炭カスを喰うんだ。熱氣を呑むんだ。いゝかよ！ お前の好きなやうにするさ——こぼしたきやこぼしな。

パツタイ——（氣さくに跳ね附けて）何をぬかしやがるんでえ！ わしやこの當番ではねえ。わし

を無理に連れ出すと罰が當るぞ。わしはお前さんのやうな奴隷ぢやねえ。わしはこゝに氣樂に坐つて、飲んで、考へて、夢を見てゐるんだ。

ヤンク——（侮蔑を籠めて）考へて、夢を見て、それがどうなるんだ。考へたつてどうなるんだ。俺達は動くんだ、さうぢやねえか。速力を出すんだ、さうぢやねえか。おいほれ、手前それが厭だと云ふのかい。俺達はこの仕事を働くんだ、いゝか。俺達はやつつけるんだ——一時間二十五ノットだ！（輕蔑してパツタイに背中を向ける。）あゝ、手前にかゝつちや氣がクサクサすらア！ やり切れねえや！（彼は後部の戸口から大殿に歩み出る。パツタイは眼さうに眼をしばたゝかせてフンと陰る。）

（幕）

## 第二場

場面——二日後。プロメナード・デツキの一部。ミルドレッド・ドーグラスとその伯母がデツキ・チミアに凭れかゝつてゐる。ミルドレッドは二十歳、弱々しい、華奢な娘で、横柄な優越感の自己意識の表情が邪靨になるが、青白い、美しい顔をしてゐる。彼女は辯辭強く、神経質で、貧血病の爲めに弱つて不愉快げに見える。伯母の方は渡手で高慢で——それに太つてゐて——年を取つた夫人である。彼女は二重顎で、長い柄の附いた眼鏡を用ゐる種類の女である。彼女は自分の顔が自分の生活上の地位を示さない事を恐れてもするやうに、物々しく着飾つてゐる。ミルドレッドは全く純

白の服装をしてゐる。

この場面では表はされる印象は海上の美しい、快活な生活の一部である——日光はデツキ一ぱいにあつてゐて、新鮮な潮風が向うから吹いて来る。この光景の中で、この二人の不似合の人工的な人物は生氣なく、且つ不調和である。年若い方は臍脂で染めた控り粉の灰色の塊のやうである。若い方はその身體の生活力が、彼女が氣附く前に崩されたやうで、その生命の精力の表情はなく、只單に人工的で、その精力が既に費ひへらされてゐるやうである。

ミルドレッド——(嬉しい夢でも見てゐるやうに見上げて) まあ何て黒い煙が空に渦巻いてゐるんでせう！ 奇麗ぢやなくつて？

伯母——(見上げようとせすに) 煙はどんなのでも厭なものですよ。

ミルドレッド——ひいおばアさまはよく葺を召上つてゐらしつたわ——粘土製のパイプで。

伯母——(遠つて) 下品です事！

ミルドレッド——ひいおばアさまは決して下品な人ぢやありませんでしたよ。時が立つて見りや

あのパイプも風雅ですわ。

伯母——(うるささうな風をして、然しいらして) あなたが大學で習つた社會學は、機會さへあつたら墓をあばいて、古い骨を掘り出すように教へたんですか。なぜひいおばアさまを墓の中にそつとして置いて上げないの？

ミルドレッド——(夢を見てゐるやうに) ひいおばアさまは天國でパイプを握つて——煙草の煙を吹いてゐらつしやるでせう。

伯母——(怒めしげに) え、あなたは生れつきの墓あばきですよ。ほんたうにさう見えますよ。

ミルドレッド——(冷やかな調子で) わたし伯母様大嫌ひよ。(批評的に伯母を見て) 伯母様はわたしの事をお忘れになつて？ 臺所のテーブル掛の蔭で、コールド・ボーク・プツディングを——でも思ふやうになると退屈なもんですわね。(彼女は眼を閉ぢる。)

伯母——(苦笑をして) つげつげ云つて下すつてありがたう。たゞわたしはあなたの附添にならなければならなかつたんですもの、今ぢや——せめて上部丈<sup>うぶさ</sup>けでも——お互に仲直りをしませうよ。そりやわたし丈<sup>さか</sup>けの事に見れば、風變りなあなたの好き氣儘にさせて上げる事は、

何でもない事だけれど——あなたがもう結構だと云ふまでともね——

ミルドレッド——(ものうげに) もう詰らないと云ふまでともでせう。

伯母——(聞えない風で語り續ける。)あなたは紐育のイーストであんなに眞剣に社會事業をやつて、もう随分勢切つたでせう——それにイーストの人達はどんなにあなたを怒んでゐるでせう。兎に角、あなたはあの貧乏人達を、あれ以上の貧乏人だと思ひ込んでゐたんですよ！——あなたはそのにも癪りないで、今度は國際的の貧民窟を作らうとしてゐるのね。え、ホワイトチャペルへ行つたら、氣附藥の用意をして置くがようぢやう。兎もあれ、わたしはあそこへ行きや、もうあなたの附添は御免です。わたしはあなたのお父さんに厭だと云つたのです。わたしは穢いものが嫌ひですからね。探偵の一隊を借りて、何でも好きな報告を取つたらいませう——あなたを案内しても呉れるでせうから。

ミルドレッド——(ひどい熱心な様子で抗議しつゝ) 後生ですから無産階級の人達を視察しようとしてゐるわたしの目<sup>め</sup>ろみを、どうか笑はないで下さいな。せめてわたしの熱心丈<sup>さか</sup>けでも買つてやつて下さいな。わたしはあの人達を助けたいと思ひますの。わたしはこの世界で何かの役に

立ちたいと思ひますの。例へば方法が違つてゐるところで、それが罪だとは思ひませんわ。わたしは眞面目に働いて、何處かで生活に觸れたいんです。(ひどく疲れて) でもわたしはひよつとしたらその元氣もなければ、良くない人間かも知れません。わたしは生れて来る前にうちの倉庫の中で黒焦けになつてゐたんですもの。おぢい様のあの厭な溶鑪は空に焔を吐いて、鋼鐵を溶かして、何千萬のお金を作りました——それからお父様が燃えてゐるその火を家庭に貯へて、それ以上のお金を作りました——そしてわたしはその財産を承継しました。わたしは轉爐吹製式の何百萬弗の無用な副産物です。つまり云つて見れば、副産物から上つて来る利益を、富を、精力でもなく、資産を作つた鋼鐵の力でもないものを、わたしは相續しました。世間の人達が門閥家の人達の事を云つてゐるやうに、わたしは黄金こがねの中で生れて、黄金の罰を受けてゐますの——人一倍その罰を受けてゐますの。(彼女は情なげに笑ふ。)

伯母——(無感覺に——横柄に) あなたは今日は眞面目ですね。ちと不似合だわ、ほんたうに——もつと陽氣にしてゐる方が似合ひますよ。あなたらしく様子振つてゐらつしやい、わたし忠告しますよ。様子振つたつて眞面目にはやれますよ、ようござんすか。そして、その上でもつと

よく今のやうな懺悔をするがよろしいわ。

ミルドレッド——(再びやさしく、且つ疲れて) え、さうかも知れないわ。わたし吐鳴り散らしたりして、濟みませんでした。豹が自分の身體からだの班點の不平を云ふ時は、高い聲で吐鳴らなければならぬでせう。(嘲笑的な調子で) 小さな豹よ、引き搔くがいゝわ、切り裂くがいゝわ、殺すがいゝわ、そしてたらふく食つて仕合せでゐるがいゝわ——籠かごの中なかにゐりや、お前の班點はわからないけれど、籠かごの中では、班點が眼立つばかりだわ。

伯母——あなたは何を云つてゐるんです？

ミルドレッド——失禮に當るといけませんから、伯母様にはもう何も申しませんよ。これは只のお話ですわ。(彼女は自分の腕時計を見る。) まあ、ありがたい。あの人達がこゝへ来て下さる時間だわ。伯母様、わたしほんたうに嬉しいのよ。

伯母——(やさしく當惑して) あなたはまさかあそこへ行く氣でゐるんぢやありませんまいね。積い

場所に——熱氣は恐ろしいものですよ——

ミルドレッド——おぢい様は始め煉鐵工でした。わたしはその血筋を受けてゐます、防火金庫の

鐵板を作る熱にさへ不感受性になつてゐます。わたしにそんな事おつしやつたつて肯きやしませんよ。

伯母——でも汽鐘室を覗くには船長さんか誰かの許しが必要ならなうでせう。

ミルドレッド——（勝ち誇つた微笑を浮べて）受けてゐますわ——船長と機関長と双方の許可を。いゝえ、ほんたうはそれも入らなかつたのよ、わたしは社會事業の方の證明書を持つてゐますから。ですからわたしが勞働者階級の生活や船の中の仕事を見ようとする事には、少しも心配がない筈でした。それにわたしはお父様がナザレス鋼鐵の社長で、此汽船會社の取締役會長で、そのお父様からも宜敷く云つたと話しました。

伯母——あなたのお父様は何もおつしやいませんでしたよ。

ミルドレッド——まあ黙つてゐらつしやい！でも、わたしはさう話しましたのよ、伯母様。それに又お父様から手紙を預つて来たけれど——それを亡くしたとも云ひました。船長さん達はわたしが寝まない中に案内しようとして骨を折つて下さいました。（興奮して）おわかりになつて？ 汽鐘室を見物するんですよ。二等機関士さんがわたしに附いて行つて下さる事になつ

てゐます。（再び自分の時計を見つゝ）もう時間だわ。屹度こゝに來て下さるわ。（二等機関士入り來る。彼は三十五歳かそこらの風采の立派な、暖れ聲の男である。彼は二人の前に立止り、帽子を一寸上げ、明らかに狼狽して、極り悪げに。）

二等機関士——ドーグラスさんでいらつしやいますか。

ミルドレッド——ええ。（毛布を取り除けて立上り）連れて行つて下さつて？

二等機関士——一寸お待ち下さいまし。只今四等機関士が参りますから。ぢきに見える筈でございます。

ミルドレッド——（嘲笑して）あなたお一人ぢやお連れになれませんの、さうなんでせう？

二等機関士——（強いて微笑し）一人よりも二人の方が安心でございますから。（彼女の視線を避けて、海の方を眺め——叫ぶ。）今日はよいお天気でございます。

ミルドレッド——さう？

二等機関士——暖かな、結構な風で——

ミルドレッド——わたしにはお寒いわ。



二等機関士——でも太陽が照つてゐますから、大變暖かでございます——

ミルドレッド——わたしには一向暖かくはありませんよ。わたし自然は嫌ひですの。わたしは丈夫な身体からだではありませんから。

二等機関士——(強いて微笑して)では、今にいらつしやる處へいらつしやれば、すつとお暖かにおなりになりませう。

ミルドレッド——地獄の事をおつしやるの？

二等機関士——(びつくりする。遂に笑つて) ハッハ！ いや、わたしは汽罐室の事を申ししてゐますのです。

ミルドレッド——わたしの祖父は鍊鐵工でございました。祖父は燃えてゐる鋼鐵をよくいぢりました。

二等機関士——(すつと海を見詰めて——不安げに) 左様でございますか。で、お嬢様、あなたはその御服装でいらつしやいますか。

ミルドレッド——これぢやいけませんか。

二等機関士——油や穢れ物におさわりになりますでせうから。お召物はたまりませんでございます。す。

ミルドレッド——かまやしませんわ。わたし白い着物を澤山持つてゐますから。

二等機関士——わたくしは古い外套を持つてをりますが、それを上にお羽織りになりましたは

ミルドレッド——わたしこの手の着物を五十組持つてゐますの。わたし戻つて來たら、これを海に棄り込むわ。そしたら洗濯が出来るでせう、さうぢやなくつて？

二等機関士——(氣を損れて) 随分穢い梯子をお下りにならなければなりません——それに眞暗な廊下が——

ミルドレッド——わたしこの着物を着て参ります。外のは厭でございます。

二等機関士——御無理には申上げません。お召物がどうならうと、わたくしには關係のない事でございますから。わたくしは只御注意までに——

ミルドレッド——御注意ですつて？ 厭な事だわ。

二等機關士——(アツキを見下ろし——ホツとして)——四等機關士が参りました。あそこでお待ちしてをります。いらつしやいますか——

ミルドレッド——いらしつて下さい。お後から参りますわ。(二等機關士去る。ミルドレッドは嘲笑的な微笑を浮べて伯母を振り返る。)阿呆ね——でも奇麗な男らしい阿呆だわ。

伯母——(侮蔑して)つむじ曲り!

ミルドレッド——しつかりおしなさい。暗い廊下があるんですとさ。

伯母——(同じ調子で)つむじ曲り!

ミルドレッド——(怒つたやうに唇を噛んで)その通りよ。でもわたしはそんなお上品な、青白いお金持とは違つつもりよ。

伯母——さうでせうとも、あなたは元氣がよくつて、家名を辱かしのめる事を何とも思はない人ですからね!

ミルドレッド——そして家名を踏み躪るのよ。伯母様、行つて來ますわ。わたしが燃えてゐる窟の中に落ちるだらうなんて心配は御無用よ、あまりお祈りをして下さらないがいよわ。

伯母——つむじ曲り!

ミルドレッド——(毒々しく)おいばれ屋さん!(憤しみなく伯母の頬を打つて、面白さうに笑ひながら出て行く。)

伯母——(うしろめがら吐息を)ほんたうだつむじ曲りね!

(幕)

### 第三場

場面——汽鐘室。後部に多数の電とワイヤーがホンヤリと輪廓を見せてゐる。頭の上に高く吊されてゐる一つの電球が、邊り一面に影の塊を投げ掛けようとして、石炭カスが充満してゐる空氣を通して光りを射落してゐる。腰まで露き出した人々の一群が電の口の前にゐる。一同は右も左も振り向く事なく前こゝみになつて、異様に、不器用に、律動的に揺れながら、自分達の身體の一部分であるかのやうにシヤアルを動かしてゐる。一同はシヤアルで電の口をあける。すると眞暗な中に燃え盛つてゐる圓い穴から、恐ろしい光が迸ばしる。そして火熱が一同の上に注ぎかゝる。鐵につな

れた個々のやうな残忍な態度で屈んでゐる人々の影輪が輪廓を見せる。彼等は律動的な動作でシヤアルを動かして、うしろの床に積まれた石炭を、自分達の前の焔を立てゝゐる電の口に投げ込み投げ込みして、旋回的に揺れてゐる。騒々しい音。爐の戸を開けたてするたびにカンといふ堅い音、石炭を噛み砕いて軋る音、鋼鐵と鋼鐵の揺れ合ふ音の浮くやうな音、これらの騒々しい音は耳を裂くばかりである。然しその音には秩序と、律動と、機械的な規則的な循環、即ちテンポがある。

暮あつく時、電の口は鎖されて、一同は休息をしてゐる。一二の者が後ろの石炭を並べて、手近な處に積んでゐる。他の者達は疲れ切つた様子で、シヤアルに凭れながら陰氣に控へてゐる。

パツデー——（一群の何處からか——哀しげに）あゝ、この當番はまだ切りにならねえのか。脊中が破けさうだ。全くもうやり切れねえ。

ヤンク——（一群の眞ん中から——極度の侮蔑を籠めて）やい、何云つてやがるんだ！ のさばつて吠えやがれ！ 相變らずの大馬鹿！ やい、これが仕事だ！ 俺は働くんだけ！ これが俺の御馳走だ！（汽笛の音——細い、甲走つた聲が眞暗な中に何處からともなく聞えて来る。ヤンクは怒めし

げな調子ではなく吐鳴り附ける。機關士の野郎が鞭で打ちやがるんだな。あいつ、俺達がノラク  
ラしてゐると思つてやがる。

パツデー——（執念深く）あいつの息の根を止めてやれ！

ヤンク——（命令的な大袈裟な調子で）いゝか、みんな！ しつかりしろ！ 俺の奴は腹が減つて  
やがるんだ！ 御馳走を喰はしてやれ！ こいつの腹の中に石炭を投げ込め！ さア、みんな  
！ こいつの口をあけろ！ （聲の下に一同は彼に續いて仕事にかゝり、ガチャ／＼と音を立て、俺  
の口をあける。俺の中から熱火の光が迸り出て、石炭をすくつてゐる人々の肩こしに注ぎかゝる。煤にま  
みれた汗の川が、彼等の背中に地圖を描く。頭の上の電氣が筋肉をふしこぶ立つて見せる。）

ヤンク——（熱心にシヤブルを動かして、数を讀みながら）一つ——二つ——三つ——（彼の聲は戦ひ  
の喜びを以て高まつて来る。）そら御馳走だ！ こいつに喰はせろ！ さア一緒にやれ！ こいつ  
にぶつ附けろ！ やつちまへ！ さア投げ込め！ こいつの番だぞ！ こいつに働かせろ！  
こいつを動かせ！ こいつに煙を出させろ！ こいつの名は速力だ！ 手前達、石炭を喰はせ  
ろ！ 石炭はこいつの酒だ！ 酒を飲み、赤ん坊！ 全速力を出して走つて見ろ！ もつと中

へ突込め！ そうらこいつが喰ひ始めたぞ！ （六日自轉車競走の機敷の客が吐鳴るやうな歡呼が續  
く。彼は俺の肩をピシヤリとしめる。他の者達は彼等の疲れた身體が許す丈の努力を以て、同じやうに  
やる。やがてガンと云ふ音を立て、烈しく燃え立つてゐた眼が次から次と消える。）

パツデー——（呻りながら）脊中が破けさうだ。わしはもう堪らねえ——堪らねえ——

（同。やがて頑固な汽笛の音が再び電燈の上の薄暗い場所から響く。隔々から吐鳴り散らす叫び聲  
が起る。）

ヤンク——（上の方に拳を振りながら——侮蔑的に）よしやアがれ、畜生！ この仕事は誰がしてる  
と思つてるやがるんだ、俺か手前か。俺が仕事にかゝると、みんなが働くんだ。俺がかゝら  
なきや誰がかゝるんだ！ わかつたか！

聲——（同意して）その通りだ！

ヤンクの云ふ事を聞いたか、畜生！

ヤンクは泣き言を云はねえ。

豪いぞ、ヤンク！

あん畜生、くたばれ！

あの豚野郎！

機關士の畜生！

ヤンク——（侮蔑的に）あの野郎、ちつとも黙つてゐるやがらねえ。下卑野郎奴、いゝか。機關士の奴等はみんな下卑だ。あいつ等に逢つちや堪らねえ。やい、くたばりやがれ！ みんな、働かうぜ。さつき休んだぢやねえか。さア、俺の畜生は喰ひたがつてゐるんだ！ 大好物を喰はしてやれ！ 機關士の野郎の爲めぢやねえ。あの野郎も、あの汽笛も生きてゐやしねえ。だが俺は生きてゐるんだ、ヘン！ 俺達は赤ん坊を養つてやるんだ！ 始めろ！（彼は振り向いて俺の口をあける。一同は皆彼に見習ふ。此瞬間二等機關士と四等機關士が、二人の間にミルドレッドを連れ、左手の眞暗な中から出て来る。彼女はびつくりして、一層青くなり、その姿勢が崩れる。彼女は炎々たる熱の爲めに驚いて慄へる。然し努力を以て機關士達を離れて、一同の前に五六歩進み出る。彼女はヤンクのうしろの右手にある。凡てこれは一同がうしろ向きになつてゐる間に早く起る。）

ヤンク——始めろ、へなちよこ共！（彼は石炭をすくはうとして身をかはす、その時汽笛が再び横柄に、

無立たゝせるやうな響で鳴る。ヤンクは突然狂暴になる。他の人々はもう振り向いてゐて、白い着物を着て立つてゐるミルドレッドを見附けて、呆氣に取られて突立つが、ヤンクはまだ全く振り向いてゐないので、彼女には氣が附かない。のみならず、彼はそり返つてゐて、汽笛の鳴らし手を見附けようとして眞つ暗な中の上の方を見、片手で頭の上に兎暴にシヤアルを振り廻し、胸を叩いて狼々のやうに叫ぶ。）汽笛を止しやアがれ！ こゝへ下りて来い、下卑奴、でくのぼう奴、死に損ひ奴！ 下りて来りア打ち殺して呉れるぞ！ 俺にその汽笛をあてつけやがるんだな、フム？ 覚えてゐろ！ 腦味噌を叩き出して呉れるぞ！ 手前の咽喉の中に手前の齒を押し込んで呉れるぞ！ 手前の頭のうしろに手前の鼻つ柱をかつ削つて呉れるぞ！ 手前の腦をすたく／＼に引きちぎつて賣り飛ばして呉れるぞ、虱たかり、乞食野郎、頓馬、ひようなこの殺潰し野郎——（突然彼は他の仲間が彼のうしろの方の何物かを見詰めてゐる事に氣附く。彼は狂暴に唸りながら振り向き、跳ね返らうとして脚つて、齒を剥き出し、その小さな眼を瘳猛にキラつかせる。彼は開かれた俺の戸から射して来る明るい光の中に白い幽霊のやうなミルドレッドを見る。彼は彼女の眼を見詰めて、じつと立ちつくす。彼女の方では彼が今しやべつてゐる間に聞いた云ひ知れぬ凄忍な、無恥な、恐ろしさに打たれて、恐怖に麻痺す

る。彼の猫々のやうな顔を見、又彼に注がれた彼の眼を見ると、彼女は低い、息の望るやうな叫びを立て、彼の側から退き、ちよこまつて、身を守らうとし、彼の顔を見まいとして、両手で自分の眼を掩ふ。これがヤンクをびつくりさせて、反動させる。彼の口は大きく開き、彼の眼は狼狽する。

ミルドレッド——（氣が遠くなつて——今腕を伸べて彼女を抱きかへた機關士等に——極幽かに）あつちへ連れて行つて頂戴！ あゝ、厭なけだものだわ！（彼女は昏倒する。二人はすぐ彼女を連れ出して、後部の左手の暗がりの中に消える。鐵の戸がガーンと響く。ヤンクの方は再び激怒し、狼狽して狂暴にうしろに突き進む。彼は自分の自尊心を傷つけられたある不思議な侮蔑を感じる。彼は呻る。）

ヤンク——あん畜生！（丁度月がしまつたばかりの月にシヤアルを投げ附ける。シヤアルはガガアンと音を立て、鋼鐵の壁を打ち、烈しい音を立て、鋼鐵の床に響がり落ちる。長い、怒つたやうな、頑固な、命令的な汽笛の音が再び遠くから聞えて来る。）

(幕)

## 第四場

場面——火夫部屋。ヤンク等の組は今當番を了へて、晝飯を済ました處である。一同の顔と身體はシヤホン水でこすつたので光つてゐる。然し忙しく洗つたので、洗ひ残した眼の縁に石炭カスがこびりついて、それが黒く化粧したやうで、不思議な陰鬱な表情を見せてゐる。ヤンクは顔も身體も洗つてゐない。彼は眞黒な、物を考へてゐる人物として、一同と對照をなしてゐる。彼はロダンの「考へる人」の態度で、ベンチの前の方に腰かけてゐる。他の者の大部分は葎をのみながら、ヤンクを見詰めてゐる。半ば爆發を恐れるやうな態度で、半ば諷ふやうな態度で。

聲——ヤンクは何も食はねえ。

いや、こいつア澤山御馳走を食つたんだ。

嘔吐きやアがれ。

ヤンクは火の守りはするが顔の守りはしねえとよ。

ハッハ!

ヤンクは洗はうともしねえぜ。

忘れてゐるんだらう。

おい、ヤンク、顔を洗うのを忘れたか。

ヤンク——(陰氣に) 何も忘れやしねえ! 洗ひたかアねえや。

聲——ひつついて取れなくなるぞ。

肌まで眞黒になつちまうぞ。

ふた眼とは見られなくなるぞ、いゝか。

豹のやうに斑點が出来るぞ。

土人のやうに斑ちて丁うぞ、いゝか。

洗つた方がいゝぜ、ヤンク。

洗つて来いよ、ヤンク。

洗へ! 洗へ!

ヤンク——(怒めしげに) やい、手前達。ほうつとけ。俺が考へ事をしてゐるのが、手前等にやわからねえのか。

一同——(皮肉に嘲笑ひの調子で、一齊に彼の言葉を繰り返す。) 考へ事! (この言葉は彼等の咽喉が音聲擴大器でもあるかのやうに、金属的な響を立てる。哄然たる高笑がそれに續く。)

ヤンク——(跳び上つて挑戰的に一同を睨み附ける。) さうとも、考へ事さ! 俺アさう云つた! それがどうしたと云ふんだ? (一同は自分達の戯談を楯に取られて、彼に突然怒まれた爲めに、黙り込んで當惑する。ヤンクは再び「考へる人」の態度で坐り込む。)

聲——こいつをほうつて置け。

こいつア御機嫌が悪いんだ。

こいつアどうしたと云ふんだ？

パッデー——（一同にめくばせして）どうしたのかわしは知つてゐる。見たらすぐわかるぢやねえか。こいつア戀に悩んでゐるんだ、屹度それに違ひねえよ。

一同——（皮肉な嘲笑ひの調子で、一齊に彼の言葉を繰返す。）戀！（この言葉は彼等の咽喉が音聲擴大器でもあるかのやうに、金屬的な響を立てる。哄然たる高笑がそれに續く。）

ヤンク——（侮蔑的な高笑で）戀だつて、畜生！ 戀どころか、憎みだ。俺ア憎み抜いてるんだ、わかつたか。

パッデー——（哲學的に）賢い人間といふ奴は裏を云ふもんだよ。（段々烈しい、皮肉な嘲笑の調子になつて）只この言葉の中には戀がひそんでゐるんだ。長い梯子を下りて、顔を拜ませに入つて來たあの白い女王様のやうな美しい女を一眼見りや、汽鐘室のけだものが誰だつて戀にかゝるのは無理ぢやねえからな。（戸口から腹立つて吐鳴る聲が起る。）

ロング——（ベンチの上に跳び乗つて——熱病的に）俺達に恥を掻かせやつたんだ！ 俺達に耻を

掻かせやつたんだ、あの淫賣が！ あの機關士の野郎共が！ 見世物の猿ぢやあるめえし、

俺達を見物に來やがるとは何の事だ？ 俺達はまじめな労働者だ、俺達の顔をよごされちや黙つてはゐられねえぢやねえか。船の規則にそんな事があるのか。そんな規則のねえ事はわかつてゐる！ それにあいつ等はどうしてあんな事をしたんだ。俺は知つてゐる。俺はデツキ・ボーイに聞いたんだ。あの女郎の親父は百萬長者の畜生だによ、資本家の畜生だによ！ このボロ船が沈む丈けの澤山な金を持つてゐるやがるんだ！ 世界中の鋼鐵はそいつが作つてゐるやがるんだ！ このボロ船もそいつが持つてゐるやがるんだ！ それに手前達と俺はどうだ、兄弟、俺達は奴隷よ！ 船長でも、運轉士でも、機關士でも、みんな奴隷よ！ だからあの女郎が船底のけだものを見せろと吐かしや、あいつらあの女郎をこゝへ連れて來なきやならねえんぢやねえか！（方々から憤怒の呻り聲が起る。）

ヤンク——（まごついて彼をチラと見ながら）おい！ 一寸待て！ 手前の云つてゐるなアほんたうか。ロング——金輪際ほんたうさ！ あの女郎達の受持のボーイの奴がさう云つたんだ。さア俺達はどうしたらいゝんだ、俺はみんなに聞きてえ。俺達は犬のやうにあの女郎から侮辱されても黙



つてゐなきやならねえのか。そんな事ア船の規則にやねえ。さアこれは問題だぞ。法律に訴へて——

ヤンク——(極度の侮蔑を籠めて)畜生! 法律だつて!

一同——(皮肉な嘲笑ひの調子で、一齊に彼の言葉を繰返す。)法律!(この言葉は彼等の咽喉が音聲擴大器でもあるかのやうに、金属性の響を立てる。哄然たる高笑がそれに續く。)

ロング——選挙権所有者として、又市民として、俺達は政府に迫る事が出来る——

ヤンク——(極度の侮蔑を籠めて)畜生! 政府だつて!

一同——(皮肉な嘲笑ひの調子で、一齊に彼の言葉を繰返す。)政府!(この言葉は彼等の咽喉が音聲擴大器でもあるかのやうに、金属性の響を立てる。哄然たる高笑がそれに續く。)

ロング——(ヒステリカルに)俺達は神の前では自由で平等なんだ——

ヤンク——(極度の侮蔑を籠めて)畜生! 神だつて!

一同——(皮肉な嘲笑ひの調子で、一齊に彼の言葉を繰返す。)神!(この言葉は彼等の咽喉が音聲擴大器でもあるかのやうに、金属性の響を立てる。哄然たる高笑がこれに續く。)

ヤンク——(喉枯れ聲で)やい、救世軍に入りやがれ!

一同——坐れ! 黙れ! 馬鹿野郎! 海上辯護士!(ロングはその姿を消す。)

パツデー——(彼は誰にも邪覺されなかつたやうに、自分の考へ事を續けて——泌々と)そしてわし達のうしろにはあの女が立つてゐたんだ、そして二等機關士がわし達を指して、見世物小屋の男の口調でかう吐かしやがつたんだ。この檻の中にはあの野暴權る阿弗利加の狒々よりも、もつと不思議な狒々がゐる。わたし達は狒々の汗で狒々を料理してゐます——お前さん達にやこの言葉が聞えなかつたと云ふのかい!(彼はヤンクを侮るやうにチツと見る。)

ヤンク——(まごついて漠然と呻る。)あゝ!

パツデー——そこでヤンクはカットとなつて、あの女の頭の前にシヤベルを振り上げて向き返つた

——あの女はヤンクを見た、ヤンクはあの女を見た——

ヤンク——(ゆつくりと)あの女郎は何處から何處まで眞つ白だつた。俺は化け物かと思つた。ほんたうに。

パツデー——(烈しい、刺すやうなあてこすりの調子で)そこで一眼見ると、すぐ懸にかゝつたんだ、

嘘ぢやねえ！ あの女がお前さんを見まいとして両手で眼を押へて慄ひ上つて、あんなに眞青になつた事をお前さんは見たらうがね！ さうだ、あの女は丁度動物園から逃げ出した大猿を見た時のやうだつたよ！

ヤンク——（苦惱する——激怒の呻り聲を發して）あゝ！

パツデー——そして戀の爲めに、ヤンクはあの女の頭にシヤベルを投げ附けたんだ、只あの女が逃げ出した後だつた！（せ、ヲ笑ひの表情を浮べて）素的だよ、さうぢやねえか！ こりやア汽鐘室のなまめかしい物語さ。（一齊に大笑ひの呻り聲が起る。）

ヤンク——（感嘆的にパツデーを睨み附けて）やい、黙りやがれ！

パツデー——（ヤンクには取り合はずに——一同に向つて）それからあの女は二等機關士の腕にすがり附いたんだ。（女の聲を大袈裟に眞似て）キッスして頂戴、機關士さん。こゝは眞暗ですから、お父さんはウォール・ストリートでお金を作つてゐますから！ しつかり抱いて頂戴よ、あなた、わたしは眞暗で怖いわ、それにデツキでは母さんが船長さんに色眼を使つてゐるわ！（再び大笑ひの呻り聲。）

ヤンク——（脅迫的に）おい！ 何をふざけやがるんだ、おいほれ。

パツデー——よしやアがれ！ わしはな、お前さんがあの女の頭を打ち砕いてやればよかつたと云つてるんぢやねえか。

ヤンク——（烈しく）砕いてやるとも！ 碎かなくつてさ、待つてろ！（パツデーの側に進み寄つて——靜かに）おい、あの女郎は俺んとこそ——猿だつて吐しやがつたのか。

パツデー——言葉に出してさう云はねえからつて、あの女はさう思つてお前さんを見たに違ひねえよ。

ヤンク——（摩訶にせ、ヲ笑つて）猿だつて、フム！ さうか！ さう思つて俺を見やがつたんだな、いゝとも。猿！ 俺は猿か、フム？（激怒を爆發させて——彼女が眼の前にあるかのやうに）あの馬鹿女郎！ この男蕩し！ 俺は猿だぞ、覺えて置け！（一同を振り返つて、再びまごついて）おい、手前達。俺は機關士が汽笛を鳴らしやがるから吐鳴り附けたんだ。みんな知つてるだらう。その時手前達が何か見てゐるやうだつたから、俺は機關士が俺のうしろに忍び込んで來やがつたんだと思つた、だから俺はシヤベルであいつの頭を叩き壊してやらうと思つたんだ。處

があの女郎が光つてゐやがつたんだ！ 俺は眼が眩んだよ！ 俺はびつくりしたよ、いゝか。ほんたうさ！ 俺は化け物だと思つたんだ。あの女郎は眞白に巻き附けた死骸のやうに、何處から何處まで眞白だった。手前達知つてゐたらう。一體俺が悪いのか。あの女郎は生きてやしねえ、さうぢやねえか。それから俺は側に寄つてあの女郎がほんたうの人間だと云ふ事がわかつたんだ、それからバッテーが云つたやうに——そんな風に俺を見てやがる事がわかつたんだ——俺は堪らなかつた、いゝか。俺は誰にだつてそんな風に侮辱されちや黙つてはゐられねえ。だから俺はシャベルを投げ附けたんだ——只あの女郎がうまく逃げやがつたんだ。(狂暴に)あの女郎をやつつけたかつた！ あの女郎を粉微塵にして呉れたかつた！

ロング——そして手前は人殺しの科まで死刑になるのか。あの女郎にそれ丈けの値打はねえぜ。

ヤンク——何だつて構ふもんか！ 俺は仕返しをしてやるんだ、しなくつてさ！ あの女郎に侮辱されて許して置けると思ふか？ そんな目に逢はされてあの女郎をこの儘にして置けると思ふか？ 手前達にはわからねえんだ！ 誰だつて俺の事を侮辱したら、俺は許しやしねえ、いゝか！ ——あの女郎ばかりぢやねえ——どんな野郎共でも、どんな女郎共でもだ！ 俺アあ

の女郎をやつつけてやる！ 今に又こゝに來やがつたら——

聲——無駄だよ、ヤンク。一年かゝつたつて、手前にあの女郎をやつつけられるもんか。

ヤンク——俺があの女郎をやつつけられねえ？ どうしてやつつけられねえと云ふんだ？ あの女郎は一體何だ？ 俺と何處が違うんだ？ 猿だつて、フム？ (大膽に威張つて)俺があの女郎より上等な人間だつて事を思ひ知らしてやる。俺は生きてゐるが、あの女郎は生きてやしねえ！ 俺は生きてゐるが、あの女郎は死んでゐる！ 俺は一時間二十五ノットだ！ あの女郎をそれ丈け運ぶのは、俺がそれをやつてゐるからだ。あの女郎は只の荷物だ。さうとも！ (再びまごついて)だが、あの女郎は随分變つてやがらア！ あの女郎の手はどうだ？ 眞白で瘦せこけてゐやがる。中の骨まで見えてやがる。それにあの唇は死人のやうに眞白だった。それにあの眼は幽霊の眼そつくりだった。處で俺は、さうさ！ 全くだよ！ 猿さ！ 幽霊奴、いゝか。この腕を見ろ！ (右の腕を伸す。太い筋が立つてゐる)俺はこれであの女郎を掴へる事も、この指であの女郎を二つに引裂く事も出来るんだ。(再び途方に暮れて)おい、一體あの淫賢は何者だ、フム？ あの女郎は何をしてやがるんだ？ あの女郎は何處から出て來やがつたんだ？

どいつがあの女郎を儲らへたんだ？ どいつがあんな風に俺達を侮辱させるようにしたんだ？  
俺はあの女郎がわからねえ。あの女郎は不思議な女だ。一體あの女郎なんかど何だつて云ふんだ、フム？ あの女郎は生きてやしねえ！ あの女郎は何處にゐるんだ。(段々怒つて来て)だが、俺はこれでも馬鹿者ぢやねえぞ、さうとも、さうとも！ 俺は屹度今にあの女郎を掴まへて見せる。あの女郎が俺を輕蔑しやがるなら、今にひどい目に逢はせてやる——あの女郎が何をしようたつて、俺はびくともするもんか。俺はあの女郎をやつつけるんだ！ もう一度下りて来やがったら、籠かまの中に投ほうり込んでやる！ そしたら少しは目が覺めるだらう！ そしたらもう何も怖がらなくともよくなるんだ！ あの女郎は速力を出すんだ！ その時こそ、あの女郎は生きるんだ！ (彼は聲にせ、ヲ笑ふ。)

パツデー——あの女はもう二度とこゝへ來はしないよ。あの女は懲り／＼してゐるんだ、それに極つてアな。今ぢや寢床についてやがるに違ひねえ。醫者や看護婦があの女に鹽を飲ませて恐ろしい心持を癒なほしてゐるんだ。

ヤンク——(腹立つて)手前まで俺があの女郎を病氣にしたと云やがるんだな。さう思つてゐや

がるんだな？ 猿か、フム？ (激怒の狂暴に驅られて) あの女郎をやつつけてやる！ うんと思ひ知らしてやる——あの女郎が膝を折つて謝あやまらなさまや、あの女郎の顔を獸と云ふ程ぶん擲なつてやる！ (上の方に拳を振り廻して、片手で自分の胸を打ちながら) 屹度見附け出すぞ！ さアいか。手前を取つちめてやるぞ、畜生！ (月口に突進する。)

聲——あいつを止めろ！

あいつはやつつけるぞ！

あの女を殺して丁うぞ！

追ひかけろ！

つかまへろ！

あいつは氣が違つた！

あいつは強い！

あいつを引き倒せ！

跳ね返へらせないように氣を附けろ！

腕をしつかり押へろ！

(一同は彼のあとを附ける。そして烈しい争ひの後に多勢かゝつて、戸口の内側の床に彼を押へ附ける。)

パッデー——(身動きもせずに)そいつの気が落ちつくまで、しつかり押へてゐろ。(輕蔑して)やい、ヤンクよ、お前さんは大馬鹿だよ。あんな血の氣もねえ瘦せつこけの牝豚一疋位に、お前さんともあらう男が何のさまだね？

ヤンク——(氣違染みて、多勢に組み敷かれながら)あの女郎は俺をこんな目に逢はせやがるんだ！あの女郎は俺をこんな目に逢はせやがるんだ。さうちやねえか？あの女郎は俺の敵だ！俺は思ひ知らしてやる！放しやがれ、野郎共！俺を起せ！あの女郎に猿がどんな物だか見せてやるんだ！

(幕)

## 第五場

場面——三週同後。ファイフス・アヴェニューの五十丁目の角、晴れた日曜の朝。さつぱりした、奇麗な、廣い街の光景。軟かで快い微風。後部に二軒の商店のショウ・ウィンドウ、角店かどみせの方は寶石商で、その隣りが毛皮屋。極度の贅澤な飾りが見せびらかすやうに展開されてゐる。寶石商の窓には光り輝くダイヤモンドや、エメラルドや、ルビーや、眞珠などの寶石類が探めき、華美な冕冠や、王冠や、頸飾や、頸環などの流行品が並んでゐる。それらの一つ々に非常に大きな正札が附いてゐて、廻轉式の電氣でその非常な高價の値段が見えてゐる。毛皮屋の方でも同様である。種々な高

價な毛皮が吊り下つてゐて、美術的な電氣の光を浴びてゐる。

歩道の向うからヤンクとロンクが威張つて歩いて来る。ロンクは船員の服を着て、黒いウインソア式のネクタイに烏打帽。ヤンクは穢い水夫服に、黒いひさしのある火夫帽を無作法に横に被つてゐる。彼は數日間顔を剃らない。その険しい怒むやうな眼の廻りに、化粧をしたやうに石炭カスがこびり附いてゐる——ロンクも同じやうではあるが、この方はヤンク程ひどくはない。二人はまご／＼として町の角に突立ち、威張つて烈しい侮辱を籠めながら邊りを見廻す。

ロンク——(演説をするやうな身振りで指しながら) さア來たぞ。ファイフ・アベヌーだ。君の云ふあいつ等の綱張内は、こゝなんだよ。(烈しく) 俺達は家宅侵入者つて奴だ。貧乏人はこの芝生に上るべからずよ!

ヤンク——(陰気に) 芝生なんか見えねえぢやねえか、馬鹿野郎。(歩道を見詰めて) 奇麗ぢやねえか? こゝの上でフライ・エックが食へらア。のらくら野郎共がこゝをうろつき廻りやがるんだな。(大通りをあちこち見て——荒々しく) 氣取り屋の奴等が——それにあの女郎が——あの女

郎の仲間が、こゝらにゐるつて手前は云つたが、そいつア何處だ?

ロンク——教會にゐるやがるんさ、あいつ等! もつと金が儲かるように、神様に祈つてやがるんだよ。

ヤンク——教會? さうか。俺もこれで昔は教會に行き々々したもんだ——ほんたうさ——餓鬼の時分にはな。俺の親父とおふくろが俺をやりやがつたんだ。その癖自分達は行かすによ。日曜の朝と云ふと、いつも馬鹿に生眞面目になりやがつたつけ。(セ、ラ笑つて) 親父も、おふくろも、あれで中々の喧嘩好きさ、どつち劣らずによ。土曜日の晩には思ふ存分夫婦喧嘩をおつはじめやがつて、さしづめガーンズに出る拳闘家はだしつて云つた工合だつた。喧嘩が始まりさへすりや、椅子も、机も、脚一つ満足にや附いてゐやしなかつた。さもなきや、二人で俺に何かを手あたり次第ぶつつけやがつてよ。俺はこの家の中で、神罰つてえ奴を覺えたんだ。(セ、ラ笑ひと大威張りで) 俺はあのおいほれ親父の事を、時々思ひ出すよ。ほんたうに。(ガーンズとはマアッソンスクエア・ガーンズの事、拳闘が常に上演される紐育のサーカス。)

ロンク——君の親父さんは船乗りがい?

ヤンク——いや。波止場人足だった。おふくろがひどく俺を吐りやがつたから、俺は家を飛び出したんだ。それから辻や市場で働いた。それから船の汽鐘室に入った。さうよ。だから俺は生きてゐらア。さもなかつたら生きてやしねえ。(自分を見廻して)俺はこんな者にならうとは思はなかつた。ブルークリンの波止場で、俺は始めて船に乗つたんだ。(深い息を吐いて)船乗りはそんなに悪い商賣ぢやねえぢやねえか、フム?

ローグ——悪い商賣ぢやねえつて? フン、俺達は随分苦しい眼に逢つてゐるんだぜ!

ヤンク——(陰気に怒氣を含んだ嫌悪の情を以て)やい、畜生! ちつともるねえぢやねえか——あの女郎らしい者がよ。こんなとは厭だ。これぢやアやり切れねえや。おい、このゴミ捨場の中に奥座敷はそこらにねえのか。そこへ行つて球投げでもしようぢやねえか。こゝはあまり奇麗過ぎて、静か過ぎて、お上品過ぎらア! こんなとは厭だ。

ロング——まア待て、今にやつて来らア——

ヤンク——俺ア誰にも逢ひたくはねえ。俺はぢつとしちやゐられねえ。おい、一體手前どうしてこんなとこに俺を連れて来たんだ? 俺を殺すつもりか、フム?

ロング——君はあの女に復讐をしたかつたんだらう、さうぢやねえか。あの女が君に恥を掻かせたから、君はしよつ中さう云つてゐたらう。

ヤンク——(熱心に)そりやさうさ! 俺はサウサンブトンであの女郎を引摺へようとしたんぢやねえか。俺はドックに忍び込んで、歩道板の處であの女郎を待つてゐたんぢやねえか。俺はあの青白い顔に唾を吐き掛けてやらうとしたんだ! あの女郎の脇の底を狙つてな! そいつがどうだつた? 機會がなかつたんだ。刑事の奴が一杯るやがつた。そいつが嗅ぎ附けやがつて、俺をふんづかまへやがつた。俺はあの女郎に逢ふ事が出来なかつた。だが、今にあの女郎をやつつけてくるぞ、見てゐろ! (狂暴に)あの淫賣め! 際どい處で命が助かつたと思つてやがるんだらうが——さうは行くもんか! 今にとつちめてやる! いゝ方法がありさうなものだ!

ロング——(憎々しげに)だから俺は君をこゝへ——君に逢はせる爲めに連れて来たんぢやねえか。君はこゝの何も彼もがみんな間違つてゐる事を見てゐるんぢやねえか。君はこの事件が、只君とあの女の間の私事だと考へてゐる。然しあの女はあの女の社會の代表者だと云ふ事を

考へなきやいけねえよ。君は我々階級の意識を自覺まさなくてはいけねえよ。そしたら君はあの女一人ではなく、あの女の社會と戦はなきやならねえ事がわかる筈だ。こゝらにはあの女の社會の奴共がうよくゝるるんだ、畜生奴！

ヤンク——（自分の手に唾をして——挑戰的に）段々面白くなるぞ。やつつけろ！

ロング——今に教會がお仕舞になると、みんな出て来るから待つてゐな。（振り向いて、先づ二軒の店の窓を見る。）どうだ！ あれを見ろよ！（二人は後戻りして、寶石函の窓を見る。ロンカは激怒する。）こん畜生を見ろ！ これを見ろ！ こゝに附いてゐる値段を見ろ——俺達が汽罐室の地獄で汗を流して十遍航海するよりも、もつと高い値段がついてゐるぞ！ それにあいつらが——あの女とあの女の社會の奴等が——あいつ等の尻を追廻す爲めに、これを買つておもちやにするんだ！ この一つでもあつたら、俺達の家族は一年も餓死しないで助かるんだ。

ヤンク——やい、泣き言を言ふな！ 家族の餓死なんか糞喰へだ！ この次ぎにや手前は俺に金をせびる積りだらう。（生一本の糞め言葉で）おい、みんな素的なもんぢやねえか、フム？ 手前金がありや買へるんだぞ。（やがて振り向いて、瘦れて）だが、畜生、これが何だ？ あの女郎

が欲しけりや買うがいゝや。あの女郎がこれを買つた處で、もう生きてやしねえ。（寶石を埋めて了うやうな身振りをして）みんなこんな値打があるもんか。

ロング——（毛皮屋の店に移つて——怒つたやうに）それにこれだつてこんな値打はねえ筈だ——可哀さうな、罪もねえ動物が、あの女やあの女の仲間の鼻を暖かにする爲めに殺されて皮を剥がれたんだ！

ヤンク——（窓の中の何かを見詰めて——不思議な興奮を以て）よつく見ろ！ もう一度見ろ！ 猿の皮だ——二千弗しやがるんだ！（途方に暮れて）こんな物を買つていゝのか——猿の皮だ！ 一體全體——

ロング——（烈しく）立派な商品さ。（などけてセ、ヲ笑ひながら）世間の奴等は汽罐室の猿の皮にはこれだけの金を出さねえよ——いや、俺達生きてゐる猿共の頭と、身體と、魂をすつかり込めても、これだけの金を出さねえよ！

ヤンク——（拳を握つて、窓の中の皮に人格を傷つけられでもしたかのやうに激怒して、顔を眞蒼にしながら）俺の顔にこれを叩き附けろ！ 畜生！ 俺はあの女郎をやつつけてやる！



ロング——（興奮して）教會は仕舞つたぞ。あいつ等が出て來やがつた、あの豚共が。（ヤンクの顔をチラと見てから不安げに）ほうつとけよ、兄弟。<sup>きょうだい</sup>しつかりしろよ。暴力は失敗の基だぞ。暴力ぢや勝てねえぞ。我々は平和の手段に訴へて主張するより外は道がねえんだ、我々の要求を——世界のプロレタリアの参政権を！

ヤンク——（極度の侮蔑を以て）参政権だつて、畜生！ 参政権が聞いて呆らア。婦人参政権か！ 勝手にしやアがれ！

ロング——（尙一層不安げに）おい、落着け。適當な方法であいつ等をやつつけるんだ。神に縋つて君の向う見ずを慎しむんだ。

ヤンク——（怒つたやうに）あつちへ行つちまへ！ 手前は下卑な野郎だ。俺は暴力だ！ 俺はいつでもぶんなぐるんだ！（教會を出た群衆が右手から入つて來る。彼等は嚴かに氣取つてアラ／＼歩く。彼等の頭は窮屈に保たれて、右も左も振り向く事なく、調子のない作り笑ひの聲で話してゐる。女は口紅や、白粉や、頬紅を塗り附けて、何倍と云ふ厚化粧をしてゐる。男はプリンス・アルバート型の服を着高い帽子を被り、短いケートルをはいて、ステッキを持つてゐる。派手な人形芝居の行列ではあるが、そ

れでも人間離れのした、無氣力な不自然の中に、ある無慈悲な恐怖を籠めてゐる。）

聲——カイアフラス先生です！ 随分眞面目な方ですよ！

説教は何でございましたか。わたしは遂うとうといたしました。

急進主義についてですわ、あなた——それからごまかしの教義について、お説教がございましたの。

皆さんで百パーセント亞米利加バザーを組織いたさうぢやありませんか。

そして誰にでも所得税の百パーセントを寄附させるんですね。

何て御名案でございますやう！

お寺の幕を修覆するように、お金を奉納いたしましたませう。

でもこれまでも奉納金は随分いたしてをるんでございますよ。

ヤンク——（彼等を次ぎ々々に睨み附けながら——侮蔑的な高笑ひをして）フ、ン！ フ、ン！（一同は彼を見ない振りしながら、彼が突立つてゐる歩道の真ん中のその場所を避けて、廻り路をする。）

ロング——（びつくりして）この野郎、黙つてゐねえかつて事よ。

ヤンク——(毒々しく)行きやアがれ! 餘計なお世話だ! (彼は威張つて歩いて、シルクハットを被つた紳士にうまく突き當る。そして挑戰的に睨み附ける。)やい、手前てまへの方から付き當つたんぢやねえか。氣をつけやがれ!

紳士——(冷やかに、且つ氣取つて)御免下さい。(ヤンクを見ようともせず、途方に暮れる彼を残して通り過ぎる。)

ロング——(進み出てヤンクの腕を引掴みながら)おい、來いよ! 俺はこんな事をしろとは云はなかつたぜ。乞食の眞似は止しやアがれ。

ヤンク——(残忍に——)突き突いて彼を打ち倒しながら)行きやアがれ!

ロング——(起き上つて——ヒステリックに)ぢやア俺は行くぜ。俺はこんな事をしろとは云はなかつた。もうどんな事が起らうと、俺の知つた事ぢやねえや。(左手に逃げ去る。)

ヤンク——畜生奴! (彼は一人の夫人に近づく——不埒なセ、ラ笑ひと空世辭の眼くばせをして)姐あねさん、今日は。御機嫌はいかがです。今夜はどいつを引張り込むかね。ドックに行きや古いボイラーがあるよ、中に爬ひ込む事が出来らアね。(夫人は見向きもせず、歩調も變へずに、忍び足で歩く。)

ヤンクは他の人々を振り返る——無禮に)やア堪らねえ! 早く姿を隠さねえと、馬がびつくりするよ。こいつア全く素張らしくつて泣きたくならア! おい、御婦人方、お前さん達ははしけ船の鱧なまこ見たいだぜ。ペンキと白粉でな! 全くぞつとして了うね! まるで屠殺場に引き出された豚も同然だ! やい、行きやアがれ、畜生共! 手前等は眼ざはりだ。手前等は生きてゐやしねえや! 俺を見ろ、どうして見やがらねえんだ? 俺は生きてゐるんだぞ、わかつたか! (建築中の町の向側の高い建物を指して——威張つて)あすこに突立つてゐる建物を見ろ。あの鐵骨を見ろ。俺は鋼鐵だ! 手前等は一人前の人間で、鐵の上に生きてゐると思つてやがる。だが俺は鐵の中に生きてゐるんだ! 俺は鐵を積み上げて行く巻揚機械だ! 俺はその機械だ——その機械の内側と底だ! さうだ! 俺は鐵だ、蒸汽だ、煙だ、そしてその外の凡ての物だ! 動くんだ——速力だ——二十五階だ——俺はその頂上と底に——動いてゐるんだ! 手前等は動きやしねえ。手前等は只俺に捲上げられる人形だ。手前等は屑だ、いゝか——残り物だ——俺達が棄てる灰だ! さア、何とか返事をしろ! (然し一同は彼を見も聞きもしない。彼は兎暴に躍り立つ。)のらくら野郎! 豚野郎! 淫賣! 吶!お! (彼は怒つて男達を振り向き、不作法によつた

るが、彼等は少しも動かない。寧ろ彼の方がぶつかつて行く度に跳ね返へされる。彼は唸り續ける。行きやアがれ！ 失せやがれ、畜生！ 愚圖々々してやがるな！ さつさと行かねえか！ 飛んで行け、どうして肯きやがらねえんだ？ 肯かねえとぶち殺すぞ！ (然し一同は彼を見ようともしないで、機械的の氣取つた淑やかさで答へる。)

一同——御免下さい。(やがて一人の女が叫び聲を立てる、一同は毛皮屋の窓に急ぐ。)

女——(恍惚としたやうに、嬉しさに喘いで) 猿の皮よ！ (一同は氣取つた喜びの調子で、彼女について一齊に叫ぶ。)

一同——猿の皮！

ヤンク——(顔一面に打たれでもしたやうに反り返りながら、頭を急にうしろに引いて怒り出す。) わかつたぞ、何處から何處まで眞つ白な女郎！ わかつたぞ、この白頭の淫賣！ 猿だつて、フム？ 俺は猿だぞ！ (彼は街の石縁を掴み、それを引き抜いて投げ附けようとして屈む。そしてそれが失敗に終ると、情熱的に唸りながら、町角の街燈の柱に飛びつき、それを引抜いて棍棒代りにしようとする。丁度その時轟々と鳴る乗合自動車の音が聞え出す。太つた、高い帽子を被つて短ゲートゥをはいた紳士が歩

道から馳けて来る。彼は哀れさうな聲で叫ぶ。)

紳士——自動車！ 自動車！ 止めて呉れ！ (そして屈んで無理力を出してゐるヤンクに衝き當る。ヤ

ンクは身體の釣合を失つて轉がり出す。)

ヤンク——(挑まれた戦争であるが故に——喜びの唸りを以て跳び上る。) さア來い！ 自動車だつて、

フム？ 手前をぶち殺すぞ！ (彼は拳を振り上げて紳士の顔を打ち下ろす。然し紳士は何事も起らなかつたやうに、不動の姿勢で立つてゐる。)

紳士——御免下さい。(それから怒つて) あなたは自動車をやり過ぎして了つたね。(彼は兩手をピシヤリと打つて、叫び出す。) 警官！ 警官！ (遠くに幾つもの警官の笛の音が起る、そして警官の一群が兩側からヤンクを目掛けて突進する。ヤンクは戦はうとしたが、敷石につまづいて倒れる。シヨウ・ウインドゥの前にある人々はちつと動かすに、この騒ぎをも氣附かずにある。警察自動車隊の銅鑼の騒々しい音が近づいて来る。)

(幕)

## 第六場

場面——翌日の夜。ブラックウェル島の牢屋内の獨房の一行。獨房は前方の右手から後部の左手まで對角線狀に並んでゐる。それがうしろの方の暗がりの中に消えて、數知れずあるやうに見える。狭い廊下の低い天井から下つてゐる一つの電球が、前端にある獨房の重い鋼鐵の横木を通して光を投げ掛け、内部の方を見せてゐる。ヤンクがその中に見える。彼はロダンの「考へる人」の態度で、小籠蓋の端にうづくまつてゐる。彼の顔は黒と青の傷痕で斑ちてゐる。血の附いた繻帯がその顔の廻りに巻かれてゐる。

ヤンク——(突然夢から覺めたやうに飛び立ち、手を伸ばして横木を振はせる——驚いたやうに高聲を出して) 鋼鐵だ。これが動物園か、フム？ (見えない處にある幾つかの獨房の住み手の哄笑の聲が、ドツと聞える。そして突然止む。)

聲——(嘲笑的に) 動物園？ この檻の新らしい名だな——いゝ名だ！

鋼鐵だつて？ 口幅つたい事を云へ。これは古い鐵の家だ。

どの阿呆がしゃべつてやがるんだ？

あいつは氣遣だ。おまわりがあいつをひどくぶん殴つたんだ。

ヤンク——(陰氣に) 俺は夢を見てゐたのか。俺は動物園の檻の中にあるかと思つた——だが猿はしゃべれやしねえ、さうぢやねえか。

聲——(朝ふやうな高笑で) お前のゐるところは監獄だ！

檻だ！

園だ！

豚小屋だ！

大小屋だ！（烈しい高笑——間。）

おい、若いの！ お前は誰だ？ いや、横になつてゐてもいい。お前は何者だ？

さう、お前の悲しい身の上話をして聞かせろ。お前はどんな事をしたんだ？

どうしてお前は罪になつたんだ？

ヤンク——（陰気に）俺は火夫だつた——船の汽鐘室でよ。（それから突然激怒して、獨房の横木をがたくさせながら）俺は猿だぞ、いゝか？ 俺を馬鹿にしやがると、ぶち殺すぞ。

聲——フン！ お前は餘つ程の馬鹿者だ！

唾をして見ろ、跳ね返るぞ！（高笑の聲。）

ウン、さうだ。あいつは本式の馬鹿者よ。おい、さうぢやないか。

どうしてあいつは猿だなんて云ふんだらう？

ヤンク——（大膽に）ほんたうの事だ！ 手前達みんなは猿ぢやねえのか。（沈黙。やがて兎邊に横木を揺ぶる。）

ある聲——（激怒の濁み聲で）俺が猿だつて事を見せてやるぞ、畜生！

聲——シッ！ 馬鹿！

やかましいぞ！

静かに！

騒ぎやがると看守が来るぞ！

ヤンク——（侮蔑的に）看守？ 番人の事が、違つか。（全部の獨房から怒つて吐鳴る聲が聞える。）

聲——（宥めるやうに）いや、あいつの事を気にしないがいゝ。あいつはひどく擲られたんで、気がどうかしてゐるんだ。おい、若いの！ みんなはお前がどうしてこゝに連れて來られたか聞きたがつてゐるんだ——それともお前は話したくないかね。

ヤンク——いゝとも、話して聞かせらア。いゝとも！ 話さねえでゐられるもんか。只手前等をや俺の事がわからねえ。誰だつて俺の外には俺の事がわからねえ。俺は裁判官に話しかけたんだ、するとあいつがかう云ふんだ、「三十日間考へろ」さ！ 考へろか！ 畜生、俺はもう何週間も考へたぞ！（間の後）俺はあの女郎を引擲へたかつたんだ——俺にあんな事をしやがった

女郎をよ。

聲——(皮肉に)そら来たぞ。お前の色女だ、さうだらう？

お前はだまされたのか、さうだらう？

女つて奴はいつでもさうだよ！

この女を擲り附けたのか。

ヤンク——(嫌悪の情を以て)いや、みんな間違つてらア！ そりや矢張り女の事には違ひねえが

——手前等の云ふのたア違つてらア、そんな月並ぢやねえや。俺のは女とのいきさつでも別なんだ。あの女郎は何處から何處まで眞つ白で——汽罐室にやつて来たんだ。俺は化け物だと思つたよ。ほんたうに。(間。)

聲——(嘆きながら)そら、こいつは餘つ程變り者だ。

こいつにしやべらせろ。面白い話だ。

ヤンク——(氣に止めないで——自分の考を辿りながら)あの女郎の手が——そいつが瘦せこけて、

眞白だった、ほんたうのものではなくて、繪に描いたものゝやうだった。俺とあの女郎は百萬

哩も違つてゐた——一時間二十五ノットだ。あの女郎は猫がくはへて来た死骸のやうだった。

ほんたうにさうだった。あの女郎は生きてゐやしなかつた。あの女郎はおもちや屋の窓にぶらさがるか、ゴミ屑のてつ邊に載つかつて生きてゐたんだ！ ほんたうだぞ！(彼は怒つたやうに吐鳴り出す。)やい、みんなよつく聞け、あの女郎は俺にあんな事をしやがつたんだ。あの女郎は見せ物小屋から逃げ出した動物でも見るやうに、俺を見やがつたんだ。畜生、あの女郎の眼附が癩でならねえ！(彼は兇暴に獨房の横木を揺ぶる。)俺はあの女郎に仕返しをしてやるんだぞ。見てゐろ！ もしあの女郎を見附ける事が出来なかつたら、あの女郎の仲間を相手に取つてやるんだ。俺は今あいつ等が何處に住んでゐるか、ちやんと知つてゐる。誰が生きてゐるか、思ひ知らせてやらア！ 誰が動いてゐて、誰が動かねえか、思ひ知らせてやらア。今に見てるろ！

聲——(眞面目に、又ふざけて)こりやア面白い話だ！

その女に相當する丈けの罰を與へてやれ！

その女は何者だね？ その女は誰なんだね？

ヤンク——俺は知らねえ。一等船客よ。その女の親父は百萬長者だと云ふ話だ——ドーグラスと云ひやがるんだ。

聲——ドーグラス？ 鋼鐵トラストの社長に違ひねえ。

さうだ。俺は新聞でそいつの名を覚えてゐる。

あいつはケチな奴だぜ。

聲——おい、若い、いゝ事を教へてやる。あの女に仕返しをしたいなら、ウオツプリーに入るがよい。そしたら何か面白い事が出来るぜ。(ウオツプリーとはアイ・ダブルユー・ダブルユーの會員の事を指す俗稱か。)

ヤンク——ウオツプリー？ 何の事だ？

聲——君はアイ・ダブルユー・ダブルユーの事を聞いた事があるか。(アイ・ダブルユー・ダブルユーは「世界産業労働者」と稱する過激な思想を有する北米の労働團體の一、米國に於けるサンチカリズムと云はれてゐる。)

ヤンク——無えや。何だ？

聲——あばれ者の連中だ——悪黨の連中だ。俺は今日新聞を見た。看守の奴がサンデー・タイムスを俺に呉れたんだ。長い記事が出てゐた。上院議員のクキーンといふ奴が上院でした演説だ。(彼はヤンクの隣りの獨房にゐる。新聞のカサカサ云ふ音が聞える。) 待てよ、もう少し明るい處へ出て、読んで聞かせてやらう。いゝかね。(彼は讀む。)

「今日わが國に於てわが美しい共和國の國民をおびやす處の脅威がある——この不淨なる出來事は恰かも古羅馬の國民を脅かしたあの忌はしいカタリンの謀叛に彷彿たるものであります！」(カタリンとはルシアス・セルギアスの事、羅馬の謀叛人。)

聲——(嫌惡の情を籠めて) 畜生！ 不淨なる出來事が聞いて呆れらア！

聲——(讀み續ける。)

「即ち本員は無賴漢、囚徒、殺人犯、刺客の兇惡なる計畫を指すのであります。彼等は世界産業労働者と自稱して、あらゆる正直な労働者等を譏謗する處の手合であります。然しながら彼等の不埒極まる計畫の跡を見て、本員はこれを世界産業破壊者の名を以て呼ばんとするのである！」

ヤンク——(憤憤的な満足な満足を以て) 破壊者！ うまいぞ！ そいつア生きてらア！ 賛成だぞ！

聲——シッ！（読み續ける。）「この悪魔の如き團體はデモクラシーのわが美しい國體を毒する潰瘍である——」

聲——デモクラシーだつて、畜生！ 煮え湯をぶつかぶせろ、阿呆——間拔野郎！（一同吐鳴り出す。）

聲——シッ！（読み續ける。）「\*ケートーの如く、本員はこの上院に宣言するのであります。アイ・ダブルユー・ダブルユーは「」ばさなければなりません。なぜなら、彼等は世界最大國民の心臓に擬せられる残忍な懐剣を代表するものである。その最大國は何人も自由にして、且つ平等に生れ、常に平等の機會を持つ處の國である。その最大國は開國の祖先が各自の幸福を保證した處の國である。その最大國は眞實と、正直と、自由と、正義と、友誼とが、一人の母の乳を吸つて、父の膝の上で教養され、合衆國の光榮ある建國に依つて洗禮を受け、署名し、且つ判を押した處の國である！」（叱聲や、抽泣き聲や、輕罵の叫びの嵐、續いて烈しい高笑ひの聲。）（\*ケートーとはマルカス・オルシアスの事、羅馬の愛國者。）

聲——（侮蔑的に）七月四日高歳！

高歳！

自由だ！

正義だ！

名譽だ！

機會だ！

團體だ！

一同——（極度の侮蔑を以て）やい、畜生！

聲——クキーン議員の野郎をやつつけろ！ そらいゝか——一——二——三——（一齊に悉く吐鳴り出す。）

看守——（遠くから）みんな静かにしろ——肯かないとホースをさし向けるぞ。（騒ぎが静まる。）

ヤンク——（益々激怒して）今すぐにその議員の野郎に逢へねえか。俺にいゝ事を教へやがつた！

聲——シッ！ こゝにあいつがウォツプライに下した結論がある（讀む。）「彼等は片手を以て火を、他の手を以てダイナマイトを計畫するものである。彼等は目的を達するまでは、殺人を止



めはしない、防禦なき婦人等に對する暴行を止めはしない。彼等は社會を破壊し、偉大なる階級に卑劣なるカスを置き、世界に對する全能の神の啓示する計畫を顛倒するものである。そしてわれ等の愛すべき市民の屠牛場を作り、神の傑作たる人間を速かに猿に退化せしむべき荒地を作るものである。」

聲——(ヤンクに)おい、若いの。そら、又猿だぞ。

ヤンク——(兇暴の啼りを以て)わかつたよ。ぢやアあいつらはやつつけるんだな。あいつらはぶち壊すんだな。おい、その新聞を貸して呉れ。

聲——さうだ。あいつに新聞をやれ。君はよく覺えて置くがよい。俺達にこんなものはもう用はねえ。

聲——そらこれだ。蒲團の下に陰して置け。

ヤンク——(受取つて)ありがたう。俺はよく讀めねえが、譯はわかる。(彼は坐る。手に新聞を持つて、ロケンの「考へる人」の態度を取る。間。廊下の奥から數人の高軒。突然ヤンクは跳び上つて兇暴に啼り、ある驚くべき思想に打たれたやうになる。)さうだ——あの女郎の親父だ——鋼鐵トラスト

の社長だ——世界の鋼鐵の半分を作るんだ——鋼鐵——そいつを運轉して——動いて——俺は生きてゐる筈だつた——あの女郎をやつつける爲めに——あの女郎に唾を吐き掛ける爲めに、檻の中にぶち込まれて！畜生！(彼は獨房の列の全體が揺ぐまでに、自分の獨房の月の横木を揺ぶる。眼の覺めてゐる者や眠りかけてゐる者達が怒つて苦情を云ひながら叫ぶ。)あいつはこの——この檻を作つたんだ！鋼鐵だ！生きてやしねえや！檻だ、獨房だ、錠だ、門だ、横木だ——みんな生きてやしねえや！あいつが上に載つてゐて、俺を下に壓し附けやがるんだ！だが俺は跳ね返すぞ！火は鋼鐵を溶かして了うぞ！俺は火だ——燃え草を積み重ねたその下の火だ——火は消えやしねえ——地獄ののやうに熱いんだ——夜中にどつと燃え上るんだ——(彼の最後の言葉を云つてゐる時、彼は自分の獨房の戸を揺ぶつてガチ／＼音を立てる。)どつと燃え上るんだ」と云ふと同時に、彼は兩手で一つの門を引摺み、他の門の方に兩足を上げて、猿のやうにその姿勢を床に平行にしながら、うしろの方に甚しく反り返る。門は彼の馬鹿力の爲めに甘草の枝のやうに曲がる。丁度この瞬間、看守がホースを引摺つて突進して来る。

看守——(怒つて)わしを叩き起しやがつて承知しないぞ！(ヤンクを見る)おい、貴様だな、フ

ム？ 氣が違つたな、おい！ よし、癒してやるぞ。貴様を正氣にしてやるぞ！ (門を見ながら) ホウ、どうだ、閃をこんなに曲けて了つた！ こんな馬鹿力を持つてゐる貴様は化け物か！

86

ヤンク——(彼を睨み附けて)それとも猿か、この下卑野郎！ 氣を附けやがれ！ この通りだぞ！ (他の門を引續む。)

看守——(今度はびつくりする——左手を見て叫ぶ。)ベン、ホースに水を送れ！ うんともんで！

みんなを呼んで呉れ——緊着を持って來て呉れ！ (ヤンクの姿が隠れ、その部屋の鎖を打つ水がバチヤ〜と跳ね返る時に)

(幕)

## 第七場

場面——約一ヶ月後。港に近いアイ・ダブルユー・ダブルユー支部。建物のグラウンド・フロアの通りに面した室の内部、それに外の通りが見えてゐる。狭い通りには月が照つて、建物が黒い影を投げてゐる。室の内部は集會所で、事務室で、且つ圖書室で、穢い殖民地の子供俱樂部に似てゐる。片隅に一個の讀書机と高い椅子がある。室の真中に一個のテーブル、その上に書類と、積み重ねた小冊子、側に椅子が數個。全體が甚だ安つほく、平凡で、あり振れてゐて、奥床しさがなくて、そこらにザラにある室の通りである。秘書役が高い椅子に掛けて、大きな元帳に記入してゐる。その

87

顔の半分が陰になつてゐる。八人が十人の波止場人足、製鐵工、その他がテーブルの周圍に集つてゐる。二人が碁をやつてゐる。一人は手紙を書いてゐる。彼等の大部分は裏をくゆらしてゐる。後部の壁に大きな看板がかつてゐる。「世界産業労働者——第五十七支部。」

ヤンク——(戸外の町の奥から出て来る。彼は第五場と同じ服装をしてゐる。彼は用心して、奥床しく動く。戸の向側まで来ると、爪先で戸口に忍び寄つて、耳を澄まし、室の中の静かな事を確めて、注意深く戸を叩く。ある秘密な儀式の合言葉で尋ねてゐるかの様である。耳を澄ます。答がない。再び少し高く叩く。答がない。遂に急ぎ込んで一層高く叩く。)

秘書役——(高い椅子に腰をかけた儘振り向いて)何だ——誰か来てゐるのか。(叫ぶ)お入り、どうして入らないんだ？(室の中の一同が見上げる。ヤンクは静かに、氣を附けて、待ち伏せを恐れてゐるかのやうに戸をあける。彼は秘密の戸口や神祕が、室とそこにある人達の平凡化に依つて打ち消されてゐるのを見廻して、悪い場所に入つて来たのではないかと考へる。それから壁にある看板を見、そして氣を取り直す。)

ヤンク——(沈黙を破る。)今日は。

一同——(控へ目に)今日は。

ヤンク——(今までよりは氣安げに)俺ア悪い場所によつたかと思つたよ。

秘書役——(注意深く彼を吟味しながら)さうかも知れんよ。君は會員かね？

ヤンク——いや、まださうぢやねえ。俺は仲間に入れて貰う爲めに來たんだ。

秘書役——お安い事だ。君の職業は何かね——波止場人足か。

ヤンク——違はア。火夫よ——船の汽鐘室のね。

秘書役——(満足して)よくこの町まで來て呉れた。覺醒した君にお逢ひするのは喜ばしい。君の商賣の方ぢや、まだあまり會員がないんでね。

ヤンク——さうよ。あいつらアみんな死んでるやがるんだ。

秘書役——さう、君にその人達の眼を覺まさせて貰ひたいのだ。君の名は？ 君のカードを作らう。

ヤンク——(當惑して)名？ さうだね。

秘書役——(鋭く)君は自分の名を知らんのかね？

ヤンク——さうよ。だが可なり永い間ヤンクつて云はれてゐたよ——ポップ、さうだ——ポップ、スミスだ。

秘書役——(書きながら) ロバート・スミス。(カードにあとの事を書き記しながら) さアよろしい。半弗を拂つて貰うんだ。

ヤンク——たつたそれ丈けかい——\*四ビツツか。馬鹿に安いや。(秘書役に金を拂ふ。)\*二ビツツは米貨の二十五仙。)

秘書役——(金を抽斗に投げ込んで) ありがたう。さア、樂に居給へ。紹介は不要だ。机の上に本がある。出帆の時そのパンフレットを二三冊持つて行つて呉れ給へ。役に立つかも知れんよ。種を繕くんだ。只それが一番だ。掴まへられて焼かれちやいけない。この團體には無職者が随分入つてゐる。我々が今要るのは仕事を持つてゐる人達だ——それから同時に我々の爲めに働いて呉れる人達だ。

ヤンク——なる程。(然し彼は躊躇して、且つ不安げに會立つてゐる。)

秘書役——(彼を見詰めて——好奇的に) 何の爲めに君は戸なんか叩いたんだね? この着物の下

に洗熊あらひくまをかくして置いて、そいつを戸外そとに飛び出させるとでも思つたのかね?

ヤンク——いや。俺は錠かぎが下りてゐるかと思つたんだ——それからお前さんが覗き穴か何かから覗いて、俺が變な奴で無えかどうか一眼見るだらうと思つたんだ。

秘書役——(注意し且つ懸念して、然し氣安げな笑を以て) こゝでばかりでもしてゐると思つたのかね? あの戸はいつも錠を掛けた事はないよ。どうしてそんな事を考へたのかね?

ヤンク——(隠しても知つてゐると云ふせ、ら笑ひを以て) この村ぢや裏を云ふのがはやるのかい? 秘書役——(鋭く) 怪けしからん事を云ふね! 我々は法律を破りやしないよ。

ヤンク——(知つてゐるぞと云ふせ、笑ひを以て) いゝよ。お前さんは云はねえね。いゝよ。俺は知つてゐるよ。

秘書役——君は我々の知らない事を澤山知つてゐると見えるね。

ヤンク——(もう一度エセ笑ひをして) いや、そんならそれでいゝよ。(やがて方々から懸念さうにチラと見られるので少し怨めしくなつて) やい、いゝ加減にして呉れ! 俺はちつともお前さん達に疑はれる覚えはねえんだ。俺が生きてゐるのがわからねえのか。さうとも! 俺は正直者だ。

俺は味方になる、いゝかね。俺はお前さん達の仕事に賛成する。だから俺は入會しようと思つたんだ。

秘書役——(快げに、彼に同情して) そりや立派な心懸けだ。只君は入會したこの團體の精神をよく知つてゐるかね？ これは分り易い、明らかな事なんだが、それでも二三の馬鹿者共は我々を悪しざまに讒謗する。(鋭く) 君はアイ・ダブルユー・ダブルユーの目的をどう思ふかね？

ヤンク——いや、俺はよく知つてゐるよ。

秘書役——(諷刺的に) さうか、では君の知つてゐる事を話して見給へ。

ヤンク——(狡猾に) 俺はしゃべり立てる程よくは知らねえよ。(やがて再び怒めしげに) ねえ、おい！ 俺は正直者だ。俺は何でも知つてゐるんだ。お前さんは見ず知らずの俺を警戒してゐるんだね。お前さんの考ぢや、俺が刑事の野郎か何かとでも思つてゐるんだらう、フム？ もう止して呉れ！ 俺は生きてゐるんだ、いゝか。さうでねえと思ふならドツクのどいつにでも聞いて見なよ。

秘書役——さうでないとは誰も云やしないぢやないか。

ヤンク——俺に秘密を明かしたら、俺もお前さんに打ち明けよう。

秘書役——(驚く) 秘密を明かす？ こゝにはそんな物はないよ。

ヤンク——(がっかりして) こゝには手形がないのかい——合言葉も何もないのかい。

秘書役——こゝを何だと思つてゐるんだ——\*エルクスかね——それともブラック・ハンドかね。

(\*エルクスは角鹿を印とする愛國的の北米の結社。)

ヤンク——エルクスが何だい、畜生！ ブラック・ハンドなんざア能無しアの集りぢやねえか。俺

アさうは思やしねえ。こゝは一人前の人間の結社だらうが、違ふかね？

秘書役——君の云ふ通りだ！ 我々が公然と二本の足で立つてゐられるのは、その爲めだ。こゝには秘密はない。

ヤンク——(驚いて、然し感心して) お前さん達はいつも公然とやつてゐると云ふのかね——こんな風に。

秘書役——その通りだ。

ヤンク——するとお前さんは餘つ程のしつかりものだ！

秘書役——（鋭く）それで君は入會したんだね？ 誠意を以て盡して呉れ給へ。

ヤンク——俺に手傳はせると云ふんだね？ よし、俺は働くとも！ これが俺の手だ。お前さんはやつつける氣かい、どうだね？ よし、やるぞ！ 俺は生きてゐるんだ！

秘書役——（氣にしない風を見せ掛けて）君は社會の不公平な状態を一變しようと思ふんだね、正當な直接行動で——それともダイナマイトで。

ヤンク——ダイナマイト！ そいつを破裂させろ——鋼鐵——凡ての檻——凡ての工場、汽船、建物、監獄——鋼鐵トラスト、そして凡てを打ち壊せ。

秘書役——成る程——それが君の理想だね、フム？ それで我々に申込まうとするのは、そんな特別の仕事だつたんだね。（彼は一同に眼配せする、一同は一人々々注意深く立ち上つて、ヤンクのうしろに集まる。）

ヤンク——（大膽に）さうだ、俺はその爲めにやつて來たんだ。俺はお前さんにこの結社の一人だと云ふ事をお眼に掛けよう。百萬長者の馬鹿者のドーグラスが——

秘書役——鋼鐵トラストの社長の事かね？ 君はあいつを暗殺しようと思ふのかね？

ヤンク——いや、お前さんにわからねえ。俺はあいつが鋼鐵を作つてゐるその會社とその工場をやつつけろと云ふんだ。鋼鐵を爆發させる事を、世界中の鋼鐵を叩き飛ばす事を、俺は望んでゐるんだ。それで物事は極まるんだ！（熱心に、歡喜を感じて）俺はそれを只一人でやる！

俺は屹度やつて見せる！ 一體あいつの工場は何處にあるんだ、どうしたら入り込めるんだ。

俺はあのおいぼれをやつつける——俺がどんな事をやるか見ろ！ 煙を見ろ、それから煙が動くのを見ろ！ 俺は掴まつたつてへこたれやしねえ——いつまでだつて！ 俺はその爲めに生きてゐるんだ——俺はあいつらを笑つてやる！（半ば自身に云ふやうに）俺はあの女郎に手紙を叩き付けて、猿がそれをした事を教へてやる。ざまア見ろ。

秘書役——（ヤンクの側を離れながら）素的に面白い話だね。（彼は合圖をする。一同は囁れた聲を出してヤンクに飛びつき、ヤンクが氣附く前にその手足をはがひ締めにする。ヤンクはひどく面喰つて、抵抗する事も出来ない。一同はヤンクが武器を持つてゐるかどうかを手探りする。）

男——ピストルもない、ナイフもない。こいつを臍倒して、目を覺まさしてやらうぢやないか。

秘書役——いや。そんな手數をする丈けの値打はこいつにやないよ。こいつは大馬鹿過ぎてゐる

からね。(ヤンクの側に来て、その顔を見て嘲ふ。)ハツハ！ 儲かにこいつアこれまでにない大芝居だつたよ。おい、道化者！ 誰がお前をこゝへよこしたんだ——\*バーンズかね、それとも\*ピンカアトンかね。いや、屹度お前は陰謀を懐いてゐるに違ひない！ やい、間諜奴！ さつさと出て行け、そして無駄づかひをしてゐるお前の仲間を裏切つて、禮金にあり附くように何とでも話せ。いつでも我々をやつつける事が出来るとでも、もうやつつけたとでも、何とでも話せ。そしたら我々を牢に入れようとして卑劣な計畫をしてゐるあいつ等が喜ぶだらう。我々は宣言してゐる通りの者だ、それ丈けだ——宣言書が欲しけりや、いつでも呉れてやる。それからお前は——(彼は侮蔑するやうにヤンクをチラと見る。ヤンクは喪心したやうにぼんやりしてゐる。)いや、止さう。しやべつたつて無駄な事だ。こいつは低腦の猿だ。( \*バーンズは有名な私立探偵會社、ピンカアトンは名探偵。)

ヤンク——(兇暴に言葉を荒げて、然し無駄骨折をして)何だつて、めかし屋の畜生！

秘書役——君等、こいつを突き出して呉れ。(ヤンクは抵抗して見たが、苦もなく突き出される。仕舞に態度が獻られて突放され、ヤンクは狭い凸凹した街の真中に墮落ひにされる。彼は一聲唸つて跳れ上

り、閉め出された戸口にあげれる。然し頭が混亂してゐるので、すぐに途方に暮れて、悲しげに無抵抗になる。彼はそこに坐つて考へ込み、ロダンの「考へる人」の態度に彷彿たる姿勢を取る。)

ヤンク——(苦しげに)さうだ、あいつ等は俺が生きてゐると思つてゐるやがらねえんだ。やい、くたばりやアがれ！ 世間の奴等に碌な奴はねえ——あのおいほれ親父奴——シャボン箱に救世軍奴——みんな死に損ひだ！ 日に一時間の仕事を減らして俺を仕合せにしろ！ 日にもう一弗増して俺を仕合せにしろ！ 小半日の仕事とコーリフラワーの御馳走だ——平等な權利だ——女と餓鬼だ——選舉權だ——みんな神が俺に與へてゐる筈だ、フム？ やい、畜生！ 手前は一體どうしたんだ？ 何も彼も手前の考へてゐる事は實現されねえんだ。ざまア見ろ——考へ事とコーヒーだ——どうする事も出来ねえんだ。これがどん底の下り坂だ。手前は摺む事は出来ねえんだ、そしてどうする事も出来ねえんだ。俺が動けば、何も彼も動くんだ。俺が止まれば、全世界が止まるんだ。それが俺だ——嘘ぢやねえ、いゝか——俺は真正銘の\*インガールだ。俺は鋼鐵だつた、俺は世界を支配してゐたんだ。然しもう俺は鋼鐵ぢやねえ、今ぢや世界が俺を支配してゐるんだ。やい、畜生！ 俺にはわからねえ——眞つ暗だ。みんな間

違つてゐやがらア！（彼は猿がキーク啼く時のやうに苦笑の顔になつて月を見る。）やい、月の野郎、手前はそこにいるんだな、手前は全く伶俐さうだぜ、返事をしやがれ、フム？ 内緒事を俺にそつと教へて呉れ——どこに俺は逃けりやいゝんだ、フム？（\*インガーソールは有名な無神論者。）

98

巡査——（この最後の言葉が聞える時に、町に出て来る——鹿爪らしい顔附で）こら、早く起き上つて出て行かないと、警察に連れて行くぞ。

ヤンク——（巡査を見上げながら——烈しい苦笑ひをして）いゝとも！ 縛つて呉れ！ 牢にぶち込んで呉れ！ これが俺の返事だ。さア、縛つて呉れ！

巡査——貴様は何をしてゐるか。

ヤンク——俺をほんたうに生き抜かせて呉れ！ 俺は生れて來たんだ。さうだ、俺はそれを訴へるんだ。手帳に附けて呉れ。俺は生れて來たんだ、わかつたか。

巡査——（おどけて）貴様のおふくろが可哀さうだよ！（それから眞面目になつて）わしは貴様にかかり合つちやゐられん。さつさと出て行け。貴様を許すんぢやないが、暑まで道が遠いからな。

さア起きろ、肯かないとこの棍棒で擲り附けるぞ。さアいゝか！（自分の足元にヤンクを強く引張る。）

ヤンク——（ぼんやりとした嘲笑の調子で）やい、俺は何處へ行つたらいゝんだ？

巡査——（一打ち殴りながら——セ、ラ笑つて、取り合はぬ風で）地獄に行け。

（幕）



## 第八場

場面——翌日の黄昏時。動物園の猿小舎。ある檻の前に澄んだ鼠色の電氣の光が落ちて、内部を見せてゐる。他の檻はぼんやりと影の中に包まれて、話をしてゐる聲が呟くやうに聞える。前の檻には「ゴリラ」と書いた札が立つてゐる。大きなゴリラがロダンの「考へる」人の態度で、ベンチの上に着くまづてゐるのが見える。ヤンクは左手から出て来る。間もなく怒つたやうなキークと云ふ叫び聲が一齊に起る。ゴリラはその眼を向けるが、もう音も出さなければ、動きもしない。

ヤンク——(烈しい苦笑で)御機嫌よう、フム？ しめ、しめ、仲間がみんなゐるな！(この聲が聞えると、キークと云ふ猿の聲が静かになる。ヤンクはゴリラの檻の前に行く、そして柵に凭れてゴリラを眺める。ゴリラは黙つてじつと彼を見返る。ヤンクは親しげな調子で、半ば嘲笑するやうに、然し深い同情を心の底に籠めて話し始める。)おい、お前は情無え顔をしてゐるぢやねえか。俺はゴリラつて奴を随分見たが、ゴリラらしいゴリラには始めてお眼にかゝるよ。お前は胸も、肩も、腕も持つてゐる！ 屹度弱虫共を打つ事が出来る拳も持つてゐるに違ひねえ！(これはほんたうの諷刺である。ゴリラはそれが分つたやうに眞直に立つて胸を突出し、拳を以てその胸を打つ。ヤンクは同情的にニヤリとする。)さう、わかつたよ。お前は全世界と戦ふのか、フム？ やり損つてもいいから全世界を相手にしてやれ。(それから苦しげな調子になつて)お前にや俺の云ふ事がわからねえ答はねえ。俺達二人は同じ倶楽部の會員ぢやねえか——猿のよ！(ヤンクとゴリラは互に見詰める——間——やがてヤンクは又静かに苦しげに話し續ける。)さうだ、お前はあの女郎が、あの白い顔の淫賣が見た時の俺にそっくりなんだ！ あの女郎には、俺がお前にそっくりだつたのよ、いいかい。只俺が檻の外に逃げ出してゐて——あの女郎を殺せる自由を持つてゐた丈の違ひな

んぢやねえか。さうよ！ あの女郎はさう思つたんだ。あの女郎は俺も矢張り檻の中に入るもんだとは思はなかつたんだ——俺の入つたその檻は、お前の入つてゐるこの檻よりもつとひどいとこだつたぜ——ほんたうよ——厭なとこさ——でもお前にや遁け出す機会があらア——だが俺にはなかつたよ——（彼は困亂して来る。）やい、畜生！ みんな間違つてらア、さうぢやねえか。（問）お前は俺がこゝで何をしてゐるか知りてえだらうな、フム？ 俺は昨夜（ゆうべ）からこのベンチの下の電気で暖まつてゐたんだ。さうよ。俺は太陽が上るのを見た。綺麗だつた——何も彼も眞赤で——紅色で、青かつた。俺は空を突いて立つてゐる高い建物を見てゐたんだ——鋼鐵だ——船が幾つもある世界中から入つて来て、出て行つた——いつもみんな鋼鐵だ、太陽は暖かだつた、雲がなかつた、そして風がそよ／＼吹いてゐた。ほんたうよ、素的なものだつた。俺はバッヂーの奴が吐（く）した事がすつかりわかつた——只俺はどうする事も出来なかつた。俺はその中に生きる事が出来なかつた。及びも附かねえ事だつた。それから俺は考へ込んだ——それから俺はお前が何に似てゐるか、それを見に来る氣になつたんだ。それから俺は他の奴等が歸つて了つて、お前とたつた二人で残る時を待つてゐたんだ。おい、しよつ中その檻の中

にゐたら、どんな氣がするかね、いろんな奴がこゝへやつて来て、お前を見るんだ——白い顔の、瘦せこけた淫賣だの、そいつらの亭主ののらくら野郎だのが——お前を馬鹿にして、お前を笑つて、お前を威（おど）かすんだ——畜生奴！（彼は拳を振り上げて棚を打つ。ゴリッは檻（かご）の門（かど）をガタガタさせて喰（く）る。他の猿等が暗い中で怒つて、キー／＼聲を出す。ヤンクは興奮して話し續ける。）さうだ！ 俺も矢張りその通りの眼に逢つてゐるんだ。まだお前は仕合せだよ。お前はあいつ等の仲間ぢやねえ、こりやお前にもわかつてゐる。だが俺は、俺はあいつらの仲間なんだ——だが厭だ。あいつらは俺の仲間ぢやねえ。わかつたか。考へると厭にならア——（彼は苦しげな様子で前額を押へる。ゴリッは兇暴に喰（く）る。ヤンクはおづ／＼と話し續ける。）俺が追ひ込められた處はこゝだ。お前はぢつと坐つて、緑の森だの、藪だの、それから又何かの昔の夢を思ひ出す事が出来る。だからお前は生きてゐる、然しあいつ等は生きてゐねえ。だからお前はあいつ等を笑ふ來もねえ、只現在があるばかりだ——そしてその現在は生きてゐやしねえ。さうだ、お前は俺より豪（たか）いんだ！ お前はさうは思はねえか、どうだ？ お前はしやべれねえんだな。だが俺は

しやべつたり、考へたりする事が出来る——多分それももうお仕舞だ——多分！——考へるとをかしくならア。(彼は笑ふ)俺は地上にゐるんぢやねえ、俺は天國にゐるんでもねえ、いゝか。俺はその仲に狭まつて、どつちからもいつも打たれながら、地上と天國を分けてゐるんだ。屹度これが地獄つて云ふ奴だらう、フム？ だがお前は、お前はどん底にゐる。お前は生きてゐる！ さうとも！ お前は世界中で生きてゐるたつた一人だ、仕合せな奴め！(ゴリラは高慢らしく唸る)だからお前はあいつ等の爲めに檻の中にぶち込まれたんだ、いゝか。(ゴリラは怒つて唸る)さうよ！ わかつたか。よく考へて見りや、しやべつて見りや、それがわかるんだ——下り坂だ——深みだ——うしろだ——お前も俺も——二人にそれがわかるんだ。さうよ！ 二人はこの倶楽部の會員だ！ (彼は笑ふ——それから怒つた調子で)畜生奴！ 糞喰へだ！ 戦争、それが俺達の御馳走だ！ 戦争は生きてゐる！ あいつ等を張り倒せ、そしてあいつ等がくたばるまでぶちのめせ、ピストルで——鋼鐵で！ さうだ！ やつつけろ！ あいつ等はお前を檻の前で眺めたんだ、さうぢやねえか。それを許して置くか。檻の中で静かにキー／＼啼いてゐる代りに、勇ましく振ひ立たうとは思はねえか。(ゴリラは承諾するやうに唸る。ヤンクは兇暴な

興奮を以て話し續ける)さうだ！ お前は正しい！ お前は成功する事が出来る！ 俺とお前はだ、フム？ ——二人はこの倶楽部の會員だ！ 俺達は最後の努力を以て、あいつ等を叩き附けるんだ！ 俺達が又投げ込まれた後で、あいつ等は今もつと丈夫な檻を作るだらう！ (ゴリラは唸りながら片手から片手に飛んで、門を無理にへし狂げる。ヤンクは上着の下から鐵根を取つて檻の戸の錠を叩きちぎる。彼はその戸を押し開く)見張りから逃げろ！ 出て来て握手をしろ！ 俺はフイフ・アベヌーを散歩する事を教へてやる。二人であいつを叩き殺さう、そして樂隊に合せて歌はうぜ。さア来いよ、兄弟。(ゴリラは檻の外に靜かに遣ひ出る。ヤンクの側に行き、彼を眺めて立つ。ヤンクは嘲弄的な調子を續けてゐる——手を突出す)握手だ——これが俺達の儀式だ。(嘲弄的な調子が何かと、突然ゴリラを怒らす。ゴリラは跳び附いて、殺人者のやうにヤンクの身の廻りにその大きな腕を巻く。肋骨がホキと折れる——ヤンクは叫び聲を立てる、然しまだ嘲弄的な調子で)おい、忘れてゐた、キツスして呉れ。(ゴリラは押へ附けてゐたヤンクの身體を床に這らす。幾らか不安さうにその上に突立ち、それからヤンクの身體をつまみ上げて、檻の中に投げ込み、戸をしめる。そして左手の暗がりの中に膝やかすやうに歩き去る。おびえ泣く高い唸り聲が、他の檻から聞えて来る。するとヤンクは

動き、唸り、眼を開く。邊りが静かになる。彼は苦しげに呟く。やい——\*ジブツコでも連れて來な  
 きや、こいつにや叶はねえ。こいつ俺に勝ちやがつた、いゝや。俺は投げられたんだな。こい  
 つら俺が生きてゐると思やしなかつたんだ。(やがて突然感情的な絶望を以て) クリスト、何處  
 に俺は逃げたらいゝんだ？ 何處に俺は住む事が出来るんだ？ (急に聲が出なくなる。) やい、畜  
 生！ 無法ぢやねえか！ ひどい目に逢はせるぢやねえか！ 勝手にしやアがれ！ (彼は檻の  
 門を掴み、苦しきうに唸つて風む——途方に暮れて自分を見る——強いて嘲弄的な笑をする。) 檻の中か、  
 フム？ (サーカスの客引のやうな疍走つた聲で) 皆さん方、前に寄つてこれを御覽うじろ、これは  
 —— (彼の聲は弱る。) 正真正銘の——けだものでござい—— (彼は床の上に倒れて死ぬ。猿達が悲し  
 げにキーンと啼き聲を立て始める。處で、多分、あの獸物は遂に生きる事が出來た。)(\*ジブツコはボ  
 ランド生れの力士。)

(幕)

先驅藝術叢書  
 第八編・獸物・ユージン・オニール作

大正十四年五月五日印刷  
 大正十四年五月十日發行

・定價・金六拾錢

著作者 鈴木善太郎

發行者 東京市神田區今川小路一丁目四番地  
 福岡益雄

印刷者 東京市牛込區早稲田鶴卷町三六二番地  
 關根慶寛

印刷所 東京市牛込區早稲田鶴卷町三六二番地  
 早稲田印刷株式會社



發行所・東京市神田區今川小路一丁目四番地・金星堂

# 天鵝絨の薔薇

小山内 薫氏譯

定價八十五錢  
郵送料六錢

1	死せる生	ヒルシュフェルト作
2	新婚夫婦	ピョルンソン作
3	一瞬間の心持	キイレツク作
4	天鵝絨の薔薇	ノプロオク作

近來演劇の隆盛は古今にその比を見ない。然してその隆盛に力を致した最も功勞ある人といへば吾々は先づ第一に小山内氏に指を屈するであらう。氏は曾て左團次等の自由劇場を引ッ下けて當時の新劇運動に萬丈の氣焔を吐き、今また土方與志氏等と共に築地小劇場を創設して、新しく興らんとする民衆的演劇運動の先驅を切つてゐられる。寔に氏こそは永遠に老ふることなき青年といふことが出来る。本書は、氏が數多き歐米の戯曲の中から小劇場の爲に特に撰んで翻譯されたもので、原作の優秀と譯筆の流暢とは勿論、實上演上にも多大の好評を博したのみである。我が國に於けるこの種翻譯の定本として諸士に薦める。

# 夜の宿 (ゴルキイ作)

小山内 薫氏著

定價八十五錢  
郵送料六錢

第一幕	木賃宿地下室晝の場
第二幕	木賃宿地下室夜の場
第三幕	木賃宿横手明き地の場
第四幕	數月後の木賃宿地下室の場

近代露西亞の文豪ゴルキイの數多い戯曲中最も傑出せりと言はれる「どん底」の全譯である。ゴルキイは人も知る身に一丁字なき勞働者より身を立て、社會のどん底に放浪する無頼漢の中から、涙ぐましい神の存在を見出した人で、本篇の如きは木賃宿の地下室にうごめける十數人が醸成する美しい魂の巡禮を説いたものである。譯者は先に左團次等の自由劇場幕上げの時に自ら手がけて江湖の喝采を博し、後數回上演し、近時又築地小劇場に於いては異狀なる好評を収めたるもの、全て本書を基本とされた。ともあれ近代文藝の精神に接せんとするもの、一度は必ず讀まねばならぬ作品であることを附言したい。

米川正夫氏譯

# 農勞 露西亞小說集

四六版箱入紙裝  
定價貳圓  
郵送料拾貳錢

## 客 内

- 1 ポーラヤ・アラビヤ……………イワノフ作
- 2 ばら色の家……………エレンブルグ作
- 3 キクトリヤ・カジミロヴナー……………ソシチエンコ作
- 4 彼等に行く……………ヤコブレフ作
- 5 果樹園……………フエーデン作
- 6 まめな看護婦……………レーミツア作
- 7 洞窟……………ザミヤーチン作
- 8 谷の上……………ポリニヤーク作
- 9 蜜蜂……………イレーツキイ作
- 10 砂漠の中にて……………レフ・ルンツ作

勞農露西亞の文壇に新興藝術家として聲名を馳せてゐる作家十氏の代表作を撰んだもので、革命の血と饑餓と、怨恨と懐古と自棄と希望と光明との中に住む悩み多い露西亞國民の實情は遺恨なく本書の中に壓縮されてゐる。

# 先驅藝術叢書

— 神原泰氏裝幀 新四六パンフレット型  
— 口繪寫眞一葉 總紙數百五十頁内外  
— 定價各册六十錢 郵送料六錢

新らしいものは新らしいといふ事自身で充分に存在の意義を有すると抱月氏は言つた。敢えて異を建て、奇を好むのではない。思想の進歩と感覺の變遷は當然古きを捨て、新しき世界を求める。其處には善悪や好悪を絶した人間本然の要望があり意義がある。最近獨逸に於ける表現派の出現は決して偶然でもなく又不自然でもない。吾々は常に一步時代に先んずるものの中に何等かのよき芽を見出し、それを自己に培ふことに吝であつてはならない。本叢書はその要望から生れたものである。明日の文藝に飛躍しようとする青年の好指針を示さんとして生れたものである。内容の洗練と、譯筆の確實とは勿論、價格の至廉、裝幀の嶄新また本叢書の誇とするところである。

◇ 書叢術藝驅先 ◇

◇ 第一編 海

獨逸表現派戯曲中の逸品である。戦争の惨害と狂氣と盲目とを描き、人間と人間との間にあるべきものを探究する痛烈悲壯なる一幕物である。最近土方與志氏の手にて築地小劇場に上演され好評を博した。

戦 (戯曲)

ゲエリントン 伊藤武雄 譯

◇ 第二編 口ポット

資本主義の病的な發達が人造の労働者(ロボット)を造り出し、終にはロボットの爲に全世界を占領され、其處に再び新しい世界の創造されるといふ深刻皮肉な諷刺劇である。最近築地小劇場に上演された。

口ポット (戯曲)

カール・チャベツク 鈴木善太郎 譯

◇ 第三編 電気人形

電気仕掛の人形を傍らに侍らせて怪しき戀の陶酔に耽り、不慮なる女の心理に潜り入つて、自在にそれを嘲弄する伊太利未來派作家の代表的戯曲である。

電気人形 (戯曲)

マリネツツイ 神原泰 譯

◇ 第四編 休みの日

休みの日に會した二人の老友が、昔語りになる好箇の一幕物喜劇であつて、即ちいたり離れたりする二人の心を巧みに點出してゐる。作者は佛蘭西劇壇の新人譯は本邦劇壇の第一人者。築地小劇場の上演本である。

休みの日 (戯曲)

エミール・マゾオ 小山内薫 譯

◇ 第五編 落葉の如く

亡び行く家に住む健氣なる處女を中心に、心願き父、浮薄なる母、無頼の兄弟等を點出し、落葉の如く散り行く暇なき人の姿を描いた涙ぐましい四幕物である。

落葉の如く (戯曲)

ジュゼツベ・ジアコーサ 長沼重隆 譯

◇ 書叢術藝驅先 ◇

◇ 第六編 皇帝ジョーンス

大山師の黒人ジョーンスが皇帝の椅子を追はれてから捕縛されるまでの數時間中に起る恐怖の心理を八場を描いた驚嘆すべき表現派戯曲である。

皇帝ジョーンス (戯曲)

ユウチン・オネイル 本田滿津二 譯

◇ 第七編 群衆 II 人間

獨逸表現派の代表的戯曲である。二十世紀社會革命劇」と特注されてゐる。何時までも覺醒を知らない雷同と盲動とを事とする群衆に向つて、人間に歸れ、人間に歸れと絶叫せる、全篇血の如き叫びを以て充ちた熱烈なる劇である。

群衆 II 人間 (戯曲)

エルンスト・トルレル 伊藤武雄 譯

◇ 第八編 猿

米國一の藝術家オネイルの作品中「皇帝ジョーンス」と共に傑作中の傑作とされた「ヘヤリー・エープ」で、猿の如き水夫の生活を描いた深刻なる戯曲。

猿 (戯曲)

ユウチン・オネイル 鈴木善太郎 譯

◇ 第九編 六人の登場人物

詳しくは「作者を探して六人の登場人物——未完結のある喜劇」といふ。如何に面白いものであるかはこれによつても知られる。英文譯ジョウは本書を評して「何時の時代、何れの國民にも最もよい戯曲だ」といつてゐる。

六人の登場人物 (戯曲)

ルイチ・ピランテロ 本田滿津二 譯

◇ 第十一編 黒い假面

新象徴主義の巨匠アンドレーフの作品中、象徴的技巧を最も奔放に用ひた一種の假面劇である。心願い主人公の假面舞臺の夜に起れる恐怖すべき怪奇な事件を描いたイッピドフマの尤なるものである。

黒い假面 (戯曲)

アンドレーフ 米川正夫 譯

各册四六判假裝美本 定價六十錢 送料六錢

539
26



終